毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊定價金五錢

明治三十年二月十日發兌



第九拾五號

少年諸子の愛讀書

雨谷一桒庵編
永井鳳仙密畫

安部仲麿

以後毎月二回發兌

少年史譚 第壹編

（來二月發行）

定價六錢
郵税貳錢

少年諸子の爲になる書物を出版するようにと。四方の愛讀者より御勸めゆゑ。爾後毎月二回少年史譚を發行し。更に進んで續々少年諸子必讀の良書を出さんとす。少年史譚には面白き挿畫あり。面白き史譚を集めたり。第貳編としては。中野三鷹子の阿新丸あり。父兄たり教師たる人。毎編これを坐右に備へて。少年子弟の讀物たらしめよ。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

新刊發賣廣告

東邦協會員稻垣滿次郎序
衆議院議員島田三郎序
東邦協會員松浦充美著

已成 西比利亞鐵道

定價十二錢
郵税二錢

草木の聲なきも風これを動せば鳴る。今や「四海波靜に治る御代」と謡ひつゝある間に。疾風地を捲いて來り。怒濤天を衝て起らんとす。極東の危機歩一歩より迫りつゝあるなり。

其來るや盗人の如く來らん。誰か盗を見て初めて縄を糾ふものぞ。吾大東日本國民たるもの正に今猛省すべきの秋なり。蠢蠕たる老大國に打勝ちたるの喜を以て。汝の盃を滿す勿れ。汝が醉ふて眠れる間に。盗人は斧と刄とを以て汝が家を襲ひ。あらゆる財產を奪ひ。時としては汝の生命をも奪はんとす。同胞よ西比利亞鐵道は着々其工事を捗りつゝあるなり。

東邦協會員松浦充美氏。過般露境を跋渉せるの際。尤も意を該鐵道の狀況に注ぎ。精査詳察。記して一部をなす。これ已成西比利亞鐵道論一篇なり。本社のこれを公にするもの實に世の志士に資する所以也。乞ふ愛讀せよ。

發行所 東京京橋區日吉町四番地 民友社

家庭雜誌

○每月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵税共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

本社電話番號本局七十番

發行兼編輯人 吉崎圓吉

印刷人 金子佐平

發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治三十年二月十日發行

家庭雜誌第九拾五號

目錄


風仙

家庭雜誌第九拾五號

（明治三十年二月十日發兌）

社説

婦人の敎育

一藝一能あるを要する事

男子の敎育は一般に如何によき働き手とならしむべき乎を主眼とし、婦人の敎育は一般に如何によき幇助者とならしむべき乎を主眼とす。

是の故に男子の敎育は、普通敎育の上別に一二の専門敎育を要し、而して後に世に立て一個の或る働き手となるを得ることとなるが、婦人の敎育に至ては、もと幇助者たるを目的とするが故に、即ち良妻たり賢母たるを期し、一家の主婦として內政を掌理するを目的とするが故に、寧ろ淺くとも博かれの主義に基き、成るべく普通敎育を十分にせんとするが常也。

是れ固より然るべきの事にして、婦人の敎育は其高等なるものも唯普通學科敎育の其度を高くしたるものなる乎、然らざれば一二の遊藝科を加へたるものに過ぎざる如き、亦無理ならぬ事なりと雖、詳に之を思へば其妻となり母となるものは、妻となり母となるの修練さへ濟めば可なりとすべからず、婦人の敎育にも同じく専門の學修を要し、獨立自治の資格を作るにあらざれば大に不可なるものあるを知るべし。

其故は婦人一般の職分が人の良妻賢母たるに在りて、常に幇助者の地位に立つべきは勿論なるが、十の力あるものにして纔に八の事を成し得べきが世の常也、獨立自治の資格ありて乃ち人の妻たり母たるを得べきのみ。

世の中には兩性の間相愛すと雖、男子の位地所得纔に其一身の處世を支ふるに足るのみにして、未だ家をな

して妻子を養ふ能はざるが爲め、猶婚儀を擧ぐる能はざるもの數ふべからず。又同じ理由により、得難くして失ひ易きの好配偶を失ふものもあるべし。斯る場合に婦人にして專門の一藝一能を有し、獨立自治の處世をなし得べきものあらん乎、直に婚儀を擧げ、所謂夫婦共かせぎを以て世に立つを得べきにあらずや。

或は然らずして男子に十分の所得もあり、地位もありて立派に婚儀を擧げ、子供さへも設けて、豐かに暮しつゝありたるものと雖、人は病の器なり、何時病むまじきものにもあらず。何時死ぬまじきものにもあらず。又其地位所得の如きは勿論常なる能はざるものにして、今日の富榮も未だ明日の凋零を測るべからざる也。加之苟も一個の男子たらんものは何人も主義あり意見あるものなれども、生計上の憂ありては、躰面ある出處進退をなし難し。斯る場合の如き、妻に一藝一能ありて獨立自治の處世をなし得べきものならん乎、良人をして躰面ある出處進退をなして內顧の氣遣なきを得せしむるのみならず、一旦家の不幸に逢ふも可愛の子女を路頭に迷はしむる如き事あるべからず。

唯に此等の場合に婦人の一藝一能を必要とし、獨立自治の資格を缺くべからずとするのみならず、世上滔々たる婦人が、思はしからぬ婚儀を擧げ、一生を契るには頗る不滿足なる人にも其終天の身を托せざるべからざる不幸は、畢竟するに婦人に自治獨立の資格なくして、爲に撰擇の自由を拘束せらるゝもの多きに職由するもの比々然り。況や婦人と雖必ずしも人の妻たり母たらざるべからざるにあらずして、自治も可なり、獨立も亦可なるをや。縱令婦人は悉く妻たり母たらざるべからずとするも、世事の常なき寡婦となり獨身となる事もありて悉く妻たり母たる能はざるの場合あり。身に一藝一能なく自治獨立の資格なくんば、斯る場合に忽ち路頭に迷ふべく、節なきものは操を賣り、志あ

るもの饑死するの窮境に陥るやも未だ知るべからざる也。

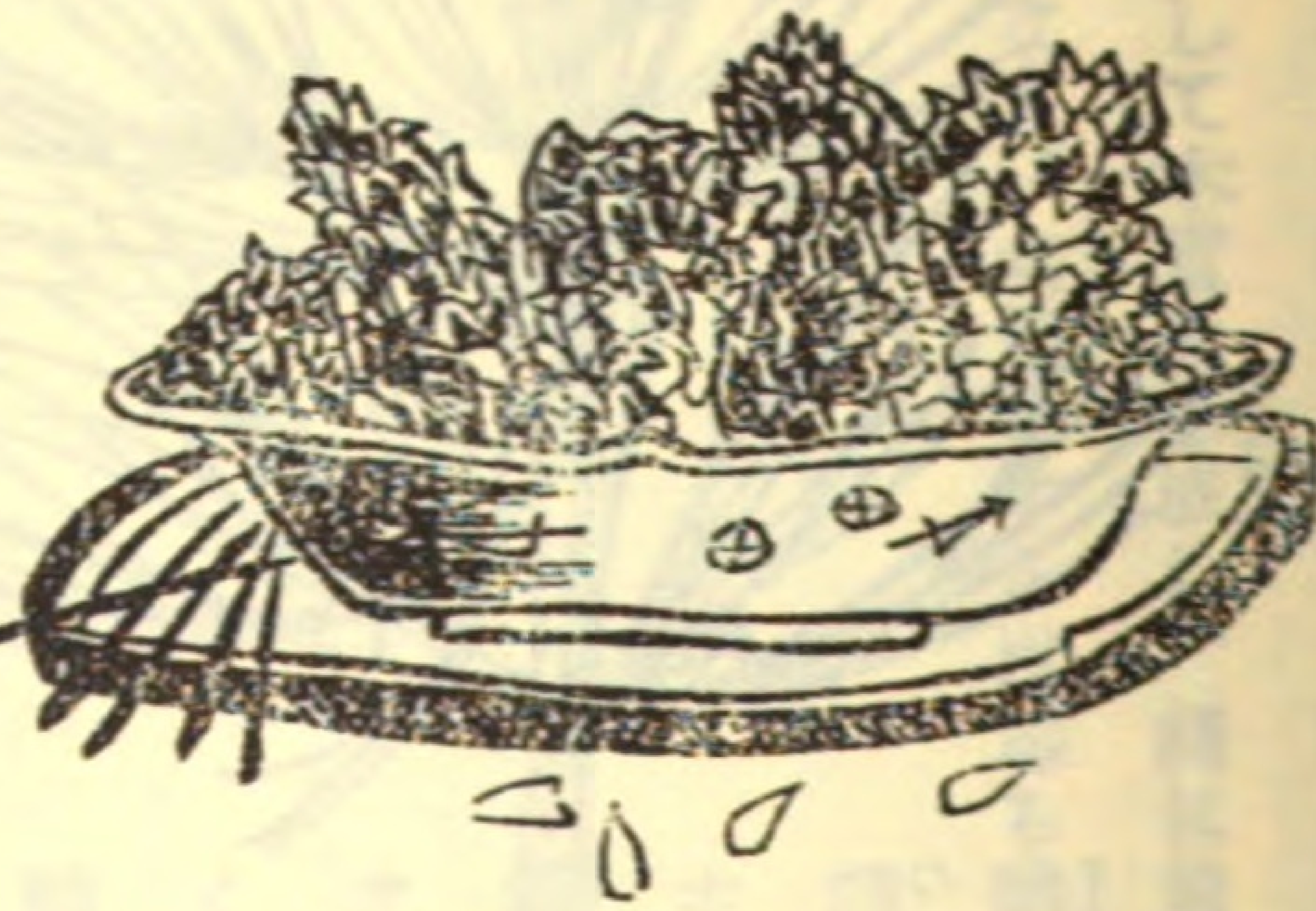
之を要するに獨立自治の資格あるものにして乃ち人の妻たり母たるを得べし。其何藝何能なるを問はず、男子に必ず一藝一能の身を立るに足るものなかるべからざると共に、婦人にも同じく一藝一能の專門的敎育ありて、何時にても獨立自治し得べき資格なくんば不可也。而して其一藝一能は、成るべく人の妻とし母として爲し得べきものなることを要し、家事を處理しつゝも、子女を敎養しつゝも爲し得べきものなるをよしとするのみ。

科學

風變りの茶受

市村塘

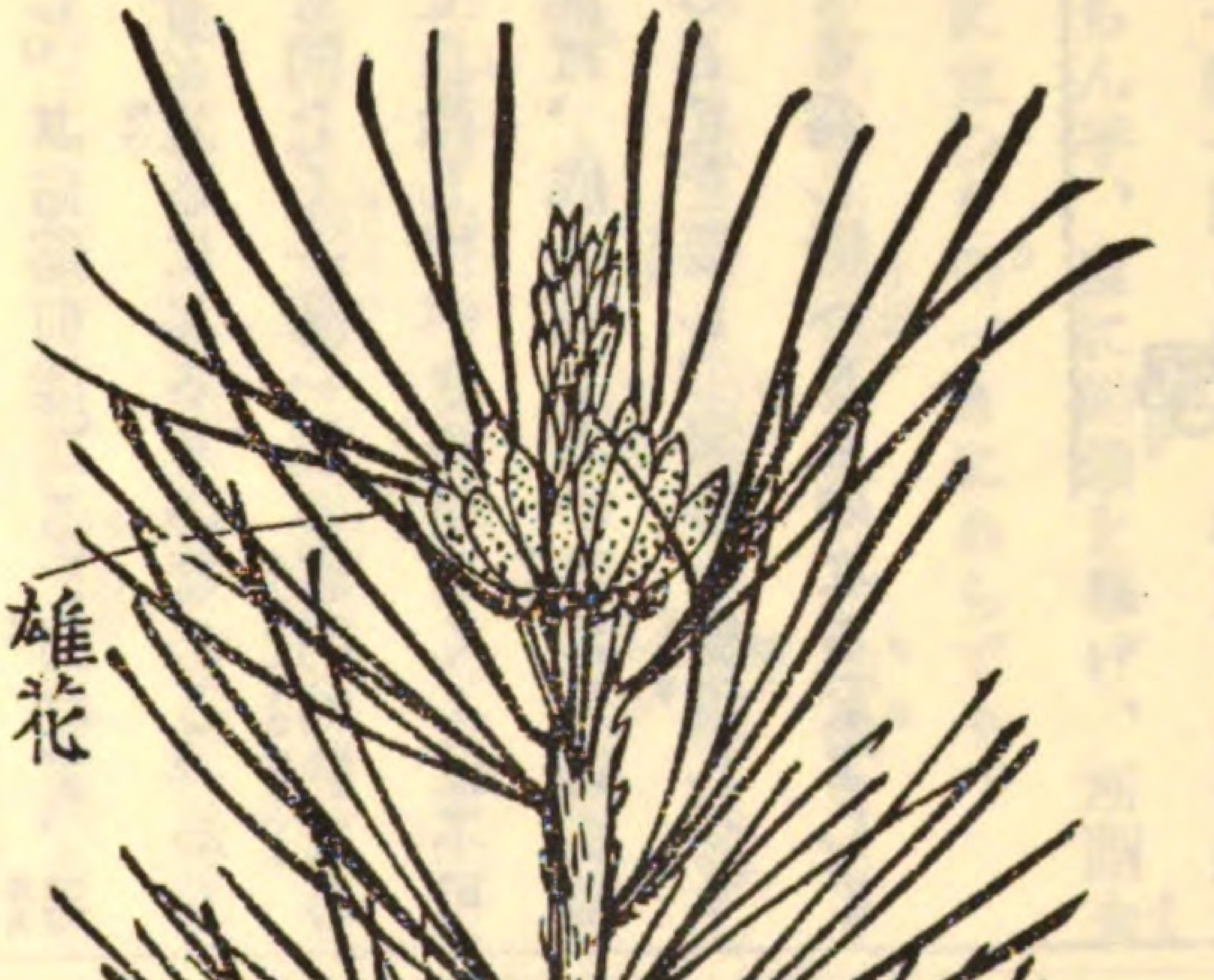
胡桃の砂糖漬、昆布入の羊羹など餘り風變りの茶受と



いふに足らず、玆に持ち出す話は、一種食用に供し得る味旨き松の實の事なり、口に入るゝ迄に手間とるも一興、且つは胃を傷ふ程食ふと出來ねば、細君が子供衆二三遊び居る時など、圖の如き松毬を三四箇菓子盆に盛り、実針を添へて、出し「さあ、皆さん松毬を採つて其間の實を実針でつゝき出して御

食がんなさいよ、こうゆう偶合にして」と、自らやつて見せながら、其科學的談話を插き込むべし、隨分家庭敎育上有益のことと思ふ故、予は先づ世の細君に御招介申さん。

扨御承知の如く、通常の松の實は形小なるのみならず樹脂臭くて、とても食ひ得るものにあらず、東京邊の人は多く「松球の實が食へるものか」と跳ね付けるべきも、是全く食ひ得る松實あるを知らざればなり、避暑若しくは用向にて奥州の青森南部山形諸方へ赴きたる人は「松實糖」と稱する菓子あるを知り給はん、これは只該松實に砂糖の衣を着せたるものにて、寧ろ乾燥したる松球よりほしくり出す實の味、淡泊妙美なるの優れるに如かざるなり。



雄花

かゝる松毬を結ぶ松樹は、矢張り五葉あれば五釵松(Pinus pentaphylla, Mayr.)の變種ならん、葉色遙望白みを帯へとも庭前の五釵松の如く銀白色ならす、加之葉は著しく長し、拗くも十數年を經過したるものにあらされば、決して結實するとなし、五六十歳のもの能く豊熟す、松毬の長さ四五寸幅三寸許あるを常とえ、其大なると殆んど他の松類に見ざる所とす。

凡て、雄雌、花を異にすると圖の如くにして、雄花は穗狀の群團となり、新芽の側邊に繞着し、各穗數十の葯房より成れり、熟期に至れば內より黄色の花粉を吐く、雌花は多く同株にあるも新芽の頂端に於て僅か二三箇を着生するに過ぎず、各鱗穗を成し其鱗片は螺旋狀に排列せり、子鱗(Deck blatt)は全く擁鱗(Schuppe)より離れ、二箇の胚珠を具へ、其の珠孔下に向ふ、1且胚珠受精して種子となり、漸く熟するに及んでや、子鱗增大して木質を形成し、終に前記の松毬(Zapfen)とはなるなり、食用とするは即ち鱗片內側に占位する種子に外ならず、主として種子內乳(Endorperm)を食ふなり、言ふ迄もなく、松類にありては顯花植物、裸子部(Gymnospermas)に屬すれば杏桃などの如く、所謂子房なるものを欠如す、隨ふて種子の露出は勢ひ免がれざるとなれるなり、或は子鱗を以て子房壁の裂開したるものと見做すも一理ならん、されば吾人の松の實を食ふは、鳥杏桃の核を食ふのと其趣きを同ふするも



のといふべし。

該松材の應用は勿論莫大なれども、樹脂類に富むを以て松根油(Terpentin öl)製造には極めて大切なり、そは松、樅の鱗片間、何處も彼處も粟飴樣に樹脂の蟠懸せるを見ても知るべし、其僻種實は少しも其臭香を帶びざるは亦奇といふべし、先は是丈にて大概御解りになられしならん。　(了)



春の歌　紀貫之

春ごとにたえせぬものは年をへて
かぜによらるゝ青柳のいと」

みし人はこぬ宿なれど櫻ばな
色はかはらずはなぞ咲きける」

春霞たちまどりつゝ稲荷やま
こゆる心のひとしれぬかな」

梅の花まだちらねども行く水の
底にうつれるかげぞ見えける」

春の色はまた淺けれどかれてより
綠ふかくもそむる松かな」

鶯に花しられげはなけれども
はる來る道のものにぞありける」

わがせこが衣春雨ふるごとに
野邊のみどりぞ色まさりける」

春日野の若菜つみにや白妙の
そでふりはへて人の行らん」

史談

曲亭馬琴と彼の養女

其の字生

讀者諸子のうち、八犬傳を讀みしあらん。よし又たと

ひ讀まずとも、其名を聞きし、必ずあるべし。八犬傳は、我國小說界の奇寶なり。宏瀚百冊以上に及ぶ。唯その量のみについていふも、誠に大々的大作なり。况んや仕構壯大、文章華麗、兩者兼備はりて、一つの間然するものなき、彼れが如きに於てをや、豈奇作なりといはざるべけんや、豈傑作なりといはざるべけんや。

宜なるかな、宜なるかな、筆を文化十一年に初めて起こし、稿を天保十二年に於て脫す。其間數へ見れば實に二十八年の長日月、堅忍不秡荒さむことなく、孜々兀々の餘りに成る。

文運隆盛を以て大ひに驕り、多士濟々を以て大ひに驕る、今明治昭代に於て、誰か斯の如き大作を、夢にだも作り能ふものぞ。片々僅かに百數葉、拙劣の文を以て、陋醜のことを漸くまとめ、揚々得々我は顏なる賣文郎、これに對して何等の顏ある、これに對して何等の言ある。

我れ玆に、此大傑作の作者を傳し、其日常に於ける彼れが素行、そもそも如何にありしかを見、もし其中に於て倣ふべきもの、或は學ぶべきものゝありせば、諸子と共にこれをならひ、諸子と共に學ばんとす。

此大傑作の作者、號を曲亭馬琴といふ。幼名は倉藏、後に淸左衛門と改む、通稱瑣吉、字は解。性を瀧澤氏と稱す。幕士松平信成が家臣、瀧澤興藏が第三子なり、年江戶飯田町に於て生まる、幼にして頗る穎悟、神童の譽まれ、夙とに四隣にたかゝりき。

大凡百世につたふもの、由來薄命の人多し。そもそも何の故なるか。我このことを古人に聞く、天の大任を此人になさんとするや、必らず先きに難に處し、以て其器を鍛錬すと、實に然らん、實に然らん、實に然るものあらん。

余が曲亭馬琴翁、彼も亦薄命の人なりき、實に不幸の

人なりき。

父を幼冲の時に失なひ、母の手一つに養はる。長兄興旨、父の跡を繼續して、小祿一家を支へしも、故ありて忽ち致仕し、生計足らず勝なりき。僅かに九歲、入りて小主の御附となりし、士人の身には多くあること、其頃の常とはいへども、彼れにありては唯それの　にあらざるなり、即ち幾分か母が手を助けなんとの心なるべし。

斯る孝心を以て仕へたり、さるにこれ憐れむべきかな、彼れが小主、富貴に驕りて性兇惡、虐使縱橫到らざるなく、慘暴至極なさゞるなし。されば思はざる過誤。いふにも足らぬことのため、彼が呵責のしもとを受けし、それ日におよそ幾度なりし、傳へ聞く我れ、淚おほへず袖に滿つ。されども孝心の深き、母を思て耐へ忍び、たゞたゞ小主の心、直ほりなんことを希ひしも、更に更に其こと甲斐なく、日にまして亂暴いよゝ募りければ、流石の彼も遂ひに耐へ得ず、隨從五年、これを一旦のいたづらごとゝ思ひなし、斷然主家を脫去れり、その恨けだしそれ幾何。

木枯に、おもひたちけり、
　　　神　の　旅。

俳句一首、これを房壁に殘して去れり。

彼れが心あはれむべし、小主の兇暴にくむべし、誰かいふ、彼れは主家を脫走せしもの、後日喋々忠を說く、或は自家撞着にあらずやと。我れ大ひに彼れがために解かんとす。されどもまた、却つて私かにこれを思ふ、迂言解するの用更になきかと、たゞ一言、忠臣は遂に其主に殺さるべきか、無理非道なる其主に遂ひに殺さるべきか、これを以て、これを其種の人に問はんと欲す。

長兄興旨、これをきゝに大ひに驚き、諭示懇々到らざるなく、更に他家にすゝめて徒士となす、されどもまた、

玆も日ならず辭し去れり、斯の如きもの其後再三、いづれもいづれも皆果さず、遂ひに彼れは、父の如く、兄の如く、士人となること能はざりき。

去りて官醫山本宗英が門に入り、其の弟子となつて學び、傍はら犬馬の勞を取る、純然たり、彼れは今の玄關番、存所そこらの人の如くなりと暮しき。

金匱傷寒の醫書、草根木皮の藥材、數々これを研究し、漸々これをさとるありしも、生得の嗜好こゝにあらざりしかば、これさへも亦、遂にはたさず、中途にして止め、再びこれをなさんとせざりき。

それよりは、其頃の碩儒、英才機敏の人として、其名大ひに一時に高く、優に同輩に拔き出たりし、龜田鵬齋の門に遊んで、漢籍詩文、日々講筵に侍して、大ひに得たるところあり、されどもまた、究屈なる學究、程朱の説に束縛されて、井蛙其他を知らざるは、彼の欲せざるところなりしが、彼れはまた、其師の如く、儒者となり了すことも、遂ひにせざりき、されど請ふ誤るなかれ、彼れはそれと共に儒道忠信の説さへも、併せ取らざりし程の愚ならざりき、そは彼れが後年、其筆にせしところのもの、小説に、隨筆に、雜纂に、其他各種の文によりて、これを伺ひ知るを得べし、寧ろ彼れは儒説に心醉せし嫌なるばかりなり、たゞ儒説を奉じたるのみ、迂濶なる儒者とならざりしのみ。

菊池吾山とて、名を文政の俳史にとゞめし、正風の俳師、其人に點を請ふて、彼れが俳諧をならひしこと、蓋し此時前後なるべし。

嗚呼、調べ去り、調べ來れば、彼れが一身種々多樣、彼れを學び、此れをならひ、いづれもつひにならざりし、其のならざりしところこそ、大ひになりし所なり、即ちかれは彼れが天職、小説稗史に於て遂になれり。即ち初めにいひしが如く、宏瀚外にその類なき里見八犬傳をはじめとして、時代物に、世話物に、諷刺物に、

隨筆物に、彼れが縱橫の筆と、無量の才と、たくみに揮ひ、たくみに用ひ、これを今日にとゞめたるもの、其數實に百數十種、いづれもいづれも大部なり、就中弓張月の如き、美少年錄の如き、怪鼠傳の如き、俊寛物語の如き、共に經寸の夜光、千歳に傳へて遂にほろびざるべし。

さて彼れは、誰れに從つて小說稗史を學びたりしぞ、紀傳者これをつたへいふ、彼れは其頃の小說家、岩瀨醒、即ち京傳が門に入りて斯道學び得たりしと。言ふ處全たく虛にあらず、されど又全たく實にもこれあらず。即ち其初めに於て、彼れ京傳の家を音信づれ、師弟の約を請ひたりしに、京傳彼れに答ふらく、小說稗史、もとこれ師傳のことにあらず、たゞ天敏の才によると、彼れは即ちこれに悟とり、爾來才にまかせてこれを自修し、遂にこれを自得したり、さればこれ、彼れは誰れにもこれを學ばず、たゞ其おさなかりし昔より日夜かつて手を釋かず、多讀なせしてふ、各種の小說小本に學び實に自得なせしなり、（今の小說家中、これに似たるもの、たゞ篁村翁一人あり、即ち翁も馬琴の如く、翁の小說を自得せしなり）。

さて其小說を作せしや、實に寬政三年を以て初めとなす、それより日夜稿をついで、撓まず屈せず作せしが、いまだ家とてもあらざりければ、本商蔦屋某に寄食し其家にありて筆をとりき。

蔦屋の緣邊に遊女屋あり、寄食者馬琴の賢を聞きて、これを養子にせんと欲し、某によりて其意を通ず、馬琴これを退けて、遊女屋は實に人倫の所爲にあらず、我れ父母の遺躰をうけ、それを彼等に汚すを欲せずと、斷然謝絶なせしなど、今の世に於ける輕薄才子、貝家の婿となりて揚々得々、大道に濶歩するもの、これを聞かば愧死すべし。

また一の笑しきことは、彼れ軀躰甚だ大に力量もまた

他に超えしを、力士某のいたくめでゝ、我が弟子となりて角力になれ、されば必ず出世すべしと、頻りにすゝめたりしなど、數へ來れば甚だ多し、されど玆には一々いはず。

後家を構へて妻をむかへ、男を生む、名は興繼、醫を以て松平侯につかふ、父に似て性至孝なり、蒲柳父より先きに死す。

興繼が妻、名は路子紀藩の士、土木村某が女なり、二十二にして興繼に嫁し、一男二女を生めり。不幸其夫に別れたる後ち、馬琴老夫婦に仕かへて甚はだ至孝、實に所生の人にもまさりき。

殊に馬琴が配、相田氏といふは、性甚だ邪まにして、いはゆる姑女の嫁いぢり、些々たることにも口ぎたなく、大ひに大ひに虐使せしも、露いさゝかこれを恨む色なく、謹み仕へて怠ることなく、又其亡夫が片身なる、子女の養育これも欠けず、共に婦道を全たくせし

もの、感ずべきなり、記すべきなり。

それにまた、何よりもまして第一、彼女についていふべきは、八犬傳の末編、そを手寫なせしことゝもなり。』

馬琴後年に於て眼を病み、自づから筆を取る能はず、八犬傳の殘稿、これを口授して、一々彼女に筆記せしむ、彼女命をうけて數々營々、ことごとくこれを筆記して、一字一言誤またず、遂ひにこれを完成せり、されば馬琴もいたく感じて、此こと繰返し繰返し、それを彼れが日記にのこせり、偉なるかな、偉なり矣、順なるかな、順なり矣、まことに彼女が如きもの、老父と共にあはせつたへ、婦女の龜鑑となすべきなり、否か。

「ウェスレー」の母

岡田紫櫻

今を去る二百年の昔、英國の片田舎に一人の賢母あり

けり。名をば「スザンナ」と呼びぬ。「スザンナ」容貌秀美十九妙齢の春を以て牧師某に婚し、十九人の子供を擧げたり。其二人は歴史上に於て有名なる人物、即ち「チャールス、ウエスレー」及び「ジョン、ウエスレー」なりとす。「チャールス」は作歌を以て顯はれ、兄の「ジョン、ウエスレー」は世界の大宗教家、「メソヂスト」派の開祖として誰一人仰慕せぬものなし。小供は悉な（殊に「ジョン」を著しとす）無上の尊敬を以て母に對し、且つ最良、最賢の相談相手として愛慕置く能はざりき。家内のものみな愉快に滿ちて日を送り、罪なきの快樂に温かき母の愛に養はれ、數月の長き一度小兒の泣聲を聞かず、和氣靄然として四方に溢るゝ此の「エプオルス」の寺領なる「ウエスレー」家の「ホーム」に一度足を投ずれば、實に花の如き小兒の笑顏に接し、幼稚園に於けるが如く、幾多の小兒の其慈母なる教師の周圍に環集して、或は戯むれ或は學ぶを見るべし。ア、實に「エプオルス」の此「ホーム」こそ眞正の「ホーム」なれ。罪なき小供が天使の如く、平和の福音をもたらして、無邪氣なる遊びに耽るの場處にして、又同時に將來の英雅烈女が希望の焔をひらめかしつゝ、眞面目に勉强するの學校なり。毎日午後の五時には各兒其一定の教訓を讀み、三時間の後には必らず靜けき寢床に入るなり。子は恐れなくして如何迄も母の力を賴み、母は熱心に子に耳かたむけて、善き忠告を與ふれば、平和は常に此家庭の守神なりしなり。各兒に毎晩一定の課業を授け、且つは偉人の面白き物語など語り聞かするの習慣に付て、「スザンナ」が夫に送りし書面の一節に「（前畧）妾は子供を教育するの方法は各兒別々に温かき言語もて物語など聞かせし事最もよろしからんと存居候されば月曜日には「モッリー」、火曜日には「ヘッチー」、水曜日には「ナンシー」、木曜日には「ジャッキー」、（ジョンの事）、金曜日には「パッチー」、土曜日には「チ

ヤールス」、日曜日には「エシリー」及び「サッキー」の二人と斯樣の順序にて談話致し居候云々（後畧）」とあるを見るときは其如何に熱心に、又如何に賢く子供のために計りたりしかを知るに足らん。

「ジョン、ウエスレー」が其母に關して記せしもの丶、我等に最も興味あるものを拔譯すんに。

「彼女（スザンナ）は我意を以て凡ての罪惡と不幸の源由となし、元來宗教の敎ふる處によれば人は大能の意思を行ふべくして、自身の希望を行ふべきにあらずと思へり、故に最初より其子供に敎ゆるに服從の德を以てし、之れを以て單に彼等（子供）の幸福の源泉たるのみならず、又他人のためなりと信ぜり。家庭に於て煩み叫びの聲を聞く事は極めて稀れなりき。彼等は泣き叫ぶとも我意を徹する事能はず、寧ろ沈靜質着に其欲するところを求めざる可からざるを速かに學へり。彼等は「願くば何々を我に與へよ」といと丁寧に言ふに非れば、下男下女にだに物を求むるを許されざりき。小見は何れも一日中に「アルハベツト」を敎へられ、一日は早朝より晩暮に至るまで之れがために費やされたり。十九人の小兒同じ過失のために再び叱せらる丶ものは一人だになかりき。而して若し其過を改むるときは賞譽せらる丶を常とせり、且つ服從しかたからん事にも能く服從するものは大に歎賞せられぬ。假令失敗するとも、若し一事を企つるに善意もてするものは、必ず賛助を得、又再び失敗せざらんがために、いと深切に成功の方法を授けられしなり。所得權は重せられ、約束は必ず履行を要せられたり。」

以て「スザンナ」が家庭の風を見るに足るものあらん。「ジョン」が嘗て其母に告ん事を熱望したるが如きは、以て能く彼女が子供の上に及ぼせし感化と恩愛のいかに大なりしかを窺ふの助となるものなり。實に彼女は十九人の子供を有したりしが中にも早くも死したるもあ

りしかど尙ほ十三人は生存したりしに、細々しき家務を調理するの外、善く育兒の責任を全ふしけり。其夫が少許の借財の故を以て、牢獄の身となりたるときの如き、彼女は凡て髮飾より衣服に至るまで悉く賣代なして、夫に食を送れりと云ふ。重き育兒の任務を托せられ、辛き奴婢の仕事をも助け、身心の勞苦を大なりとせず、一生を繁忙の內に過して、尙ほ常に平和の於母影を滿面に宿し、心氣愉快、精神活潑なるもの彼女の如きは未だ歷史の多く知らざる處ならん。貧窮に處して、いさゝか屈するとなく、終始一にして、能く其生涯を淸美ならしめしもの亦彼女の如きは實に稀れなりと云ふべし。曾て其「ヨルク」の大監督に送りし書面のうちに人生五十年貧乏に處するは富有に處するよりも、却りて心安しと書きたりしは「ウェスレー」一家が非常の困乏に陷りたりしときなりき。以て彼女が度量大悟を見るべく、以て彼女が天命に安ずるの賢を覗ふべし。

朝夕二度の祈禱は實に彼女が活動の源泉となり、朝の祈は能く一日の困難に堪へしめ、夕のは能く床に入りて後の精神を休安せり。曾て「ウェスレー」家が出火の災にかゝりし時の如きも、彼女は狼狽の景色更らになく、人々のすゝむるがまゝ、熖に追はれつゝ靜かに家外に出で、唯運を天に任せて大能の惠を祈るのみなりき。「ジョン」は此時六才なりしが人によりて窓より救出されたるなり。是れより「ウェスレー」夫人は「ジョン」を以て、殊に神の撰び給ひしものとなし、殊別の注意を以て敎育しけるが、彼れは終に母の屬望に負かずして、地球上の一大偉人となれり。

曾て其夫が旅中不在のため、敎會に集まるものあるも、集會をなす能はず、又適當なる人物の夫に代はるべきものなかりしかば、身自ら夫に代はりて集會の定時に於ては必ず說敎をなしたる事ありしに、熱心なる聽衆

二百の上に出づるは常事なりしと云ふ。然るに是の事、悪様に言ひ流されて終に夫の耳に入りしかば、夫は一片の忠告を與へて、今後は説敎をなさゞらん事を望めり。此時「スザンナ」は如何なる答をなしゝ乎。夫に對して不禮の動作言語ありし乎。彼女が斯かる時に夫に對しての愛情は如何なりし乎。身は假令婦人にして、且つ一大家庭の主婦たりと雖も其夫の寺領に於て、誰一人ありて、聽衆を滿足せしむる程の説敎をなすものなく、從て集會は絶なんとする時に當つて、只全心の忠情を以て、出來得るだけの事をなせしのみ、夫にして若し此の事を善からずと思ひ給はゞ「決して忠告する事なく、廢止せよと命令し給へよ」とは是れ「スザンナ」が答なりしなり。

斯る家庭にありて、如何でか子供の發育の美はしからぬ由あらんや。女兒は敏く、柔順く、温和く、成長し、男子は兄弟の尊敬を以て、互ひに相讓り、克己以て善く、其母に事ふるに至れり。子女其母のためには生命を顧みざるの決心を有せざるはなかりしと云ふも亦宜ならずや。兒の漸く長じて、大學に入り、學殖あるの人物となりては活社會に出てたるの後と雖ども、猶は母に對しては無上の尊敬を表し、心底より實際生活の難問に接したるときの最良保護者と思ひたり。母も亦善く心を開ひて、子女の求むる處に敎へ、知慧と勇氣を以て常に身を守りたれば、知れる事は殘さず之を子女に授けしと同時に、自らの經驗の或は子供の身に適せざるをも顧みず之れを强ひて、彼等を苦むるが如き事はつゆなかりき。

其晩年は「ジョン」と共に送りたり。彼女が七十八才の年の八月の或る金曜日の午後三時頃、「ジョン」は母の病床に至りしに、早や容易ならぬ容體なりしかば、其の傍らに坐せしに、彼女は最と靜かに眼を上方に開き、恰も神に祈れるが如き有様なりき。而して一

片苦痛の聲をもらすとなくて、終に永久の眠に就けり。

文藝

はつ午

とし女

新玉の年たちかへり、嬉しき時は來りぬと、おもひなすよりも早き月日は、ひたすゝみに進み行きて、今は早きさらぎの初となりけり。上のいくつの日は初の午に當れりとて、朝まだき鼕ゝたる皷の音ちかく聞え、わらべ等のがや〳〵と騒ぎまわる有様の、いとも面白げなりければ、如何にありけるやらんとて立出てゝ打見やりけるに、赤き青きなどいろいろ紙の幟を立て、或はまた繪馬などかつぎ打つれ行くを、後よりはるか見送れる乙女子の一むれ、いと本意なげに見ゆるうちにも、見よや見よや今の間に、我が身の時は來るべし、ひいなの祭はやかてぞと、思ふ心の色おのづから外にあらわるゝものあるもおかし。

そが行くまゝに隨ひ行けば、村はづれなる細き畔道、つねは人の通はぬところも、今日ばかり時得たりげに賑はひて、いやおしに押しつれて行く、いとゞ多し。かくてその行きとまる小たかきところ、廣さわづかに三坪ばかり、冬枯のまゝにまだ芽さへ出でぬ栗の木の二株三株、熊笹の一むら繁りつるあたり、いとさゝやかなるほこらの、人の丈けよりも却りてひきく、前には五尺ばかりたかき朱の鳥居、たゞ一基のたちたりける、まことにういういしき様なれども、何となく神ゝ敷ところの見ゆるは、まことに神の威德なりけりと思はれていとゞたふとし。大造酒、もちひ、菓子、あるは赤き飯、うづたかく盛りなせるおしきのかづ〳〵、ところせきまでに並め供へたる、ひとへにめたづ心地、

嘸かしな、神も納受ましまさんと、
拜し終はりてまかで來にけり。
初午の森はさいさし田のむかふ。
田のくろに人つとひけり一の午。

春げしき

春なれや名もなき山も朝霞　はせを
桑の花の中に城あり郡山　其角
梅一輪一輪つゝの暖かさ　嵐雪
五六本よりてしだるゝ柳かな　去來
我がこさゝどぜうの逃る根芹かな　丈草
出代や給仕しまふて暇ごひ　許六
片枝に脉や通ひて梅の花　支考
春雨や鶯はいる石燈籠　杉風
夕風に何ふきあけて朧月　北枝
落椿あまりもろさについて見る　野坡
人ごみの中へしだるゝ柳かな　浪化
逢坂のかたまる頃や初さくら　千那

小說

首輪（上）

佛　モーパッサン　作
築地庵主人　譯

世の中に運命の神ほど的にならぬものはありません稼ぐに逐付く何とやらと申しますが妾も此齢になりまして始めて自分の力ほど恐ろしいものはないと心底から感心しました妾は運命の神に見捨てられたか世間の貴夫人令孃がたと同じ樣に面白き月日を送ることが出來ず親讓りの持參金もなければ將來之ぞといふ望もなくまた金滿家の若殿原に愛せられて玉の輿に乘るといふ望もない誠に哀れ果敢ない一人娘でありましたけれどもいつまでも獨りでは暮せませんから妾は否々ながらも其頃文部省の官員を勤めて居た貧乏書記と姻禮を致しましたそれが今の良人です

自分から斯樣申しては可笑しい樣ですが妾は其頃時分にはまだ娘盛りではあるし殊に生れつきが至て綺麗な

質で多くの貴夫人令嬢方から羨まれた程でしたそれ故兎角贅澤三昧をしたいといふ情慾が先にたちまして良人の貧乏世帶はとても妾には耐へきれなかつたのです

墜ちかゝつた壁と縁の破れた疊の中に取り散らしてある粗末な家具は最早見るに忍びぬまでに厭忌になり同僚の妻君ならば滿足もしましやうが妾は毎時小言と腹立の種にして居ましたそして一人の下婢が居ましたが之が山出しの肥躰で其容貌は見る度に嘔き出しそうで寢て居ても魘死されるやうでした

妾の心の中では庭の廣ひ高尚な搆への家で客間から居間まで數奇を盡して飾り付けそして親友を招待したりまたは多くの下女下男に侍つかれて笑ひ興する聲を樂み芝居も變り目には外つさず物見遊山にも綺麗に飾り立てゝ行き數多の人に羨みもてはやさるゝ樣こしたいのが勢一杯でした

妾が食事をする時に並べてある粗末な食器と不甘い食物を見ては毎時も箸を着けるに躊躇しますが良人は向側に坐りて其まづい吸物の蓋を取り之は結搆だこんな旨いものはないと舌鼓しながら嬉げに食べて居りました妾はまた鯛の刺身や鶉の椀もり其外ありとあらゆる山海の珍味を美しい食器に盛り愛嬌のこぼれる樣な下女や下男に給仕をさせてその面白きお世辭を聞きながら完爾に食事することを考へて居ました

妾はまた今の貧乏世帶ですから身の廻りは素よりの事櫛笄から簪指輪の類ひ迄飾り物といつては何一とつ用意して居ませんでした、けれども欲しいと思ふ念慮は絶間なく妾の胸に横たはつて離れません兎に角人に羨まれァー美しいとか綺麗だとかいつて人に愛敬せられたいといふこと計りに心を苦めて居たのです

妾には一人の親友がありましたそれは幼い時の學校友達でそして其人は大層金滿家ですけれども妾は今は此

人の處へ餘り顔出しも爲ませんなぜといふに妾が二月程以前に其人の處へ往て種々綺麗なものを見せられて歸つた時の腹立たしさと口惜さは今に忘れませんからです

斯く浮き／＼と妾は自分の身を美くしたいといふことばかりに苦心して居ましたが妾の良人は常に妾を慰めてそして親切を盡して呉れました

或る晩の事です良人はさも嬉しさうにニコツキながら役所から歸つて來て一封の手紙を妾に見せそして妾に云ひました

良人「オイ今日はお前の爲に大層好い土產を持つて來た

妾は何事か知らと思ひ急いで其手紙を受取り封を切つて見ると一通の招待狀でした其文は

拜啓來一月十八日木曜日夜會相催候に付官舍へ御來駕被下度此段御案内申上候敬具

年號　月　日　文部大臣　子爵　道　野　進

大　井　力殿　同　夫人　篤子

同　夫人花子殿

妾が此手紙を見る間良人は側に立て居て嘸喜ぶであろうといふ顔付をして妾の方を見詰めて居たけれども妾には嬉しくも何ともないから腹が立つて腹が立つて其儘招待狀を机の上へ投付けそして良人に問ひました、

花「これがどうしたんです

力「己はお前が大層喜ぶだろうと思てつ居た、滅多に外出をすることがないから之は大層都合の好い事ではないか。此招待狀は極僅かな人に出るのだから書記位のものにはなか／＼往かれぬのだ。それに衆皆欲しがるから己れは之を手に入れる爲にはどれ程苦勞したか知れない。上流社界の人は悉く來るから。餘程盛會だよ。

妾は眼に角を立て、大層急き込んで言ひました
「ソーして何を着て往くんです、第一着物がないではありませんか
良人はそれは氣付かなんだといふ様子で、嗤りながら答へました
「ソソレあの此間芝居へ着て往つたのがあるではないか、アレハ大層お前に似合ふと思ふよ
無頓着な良人の答に、妾は泣き出しました、ソシテ口惜くて口惜くて泣くまいと思つても涙の方が承知しません、大粒の雫が眼の隅から自然に流れて、徐々と口の側を傳はりました、此時良人は妾の顔を覗き込んで心配そうに
「ドウしたんだと問ひました
妾は一生懸命に悲い思を我慢して、濡れた頬を拭きながら、靜に答へました
「ドウも致しはしません、妾は衣裳がないから此舞踏會へ往くことが出來ません、那方の同僚で妾よりか好い仕度のある人に此招狀をお上けなさい、
良人は失望の容子で、暫く思案に呉れましたが頓て口を開きて
「お花斯様な時に着るので、極粗雑とした着物は、幾金位で出來るだろうか
妾は稍暫く考へて帶から襦袢まですつかり積つて見ました、ソシテ此儉約な良人を驚かさないで此仕度が幾ら掛けたら出來るだろうと、思案に暮れましたが、ヤットの事で決心しましたから、慄へながら微かの聲で答へました
「能は分りませんが、マー百圓もあつたら間に合ふでしよう
之を聞て良人の顔は稍々青くなり、ソシテ考へたそうでした、今丁度夫位の貯へはあるが、之は今年の暑中休暇を幸に、自分の親友と遊獵に出掛けるため、一挺

の獵銃を買ひ。また其時の旅費を辨する爲に。平素貯へて置いたのであつた。けれども良人は妾に之を割愛る決心で。きつぱりと云ひました

「ヨシ清水の舞臺から飛んだと思つて。百圓出すから精々綺麗な衣裳を仕立てるがよい

之は良人に取りては實に非常の決心でした。程なく夜會の日も近つきました。けれども妾はまだ心配で心配でならないから。鬱々と塞ぎ込んで居りました。しかし衣裳は間もなく新調されました。或る晩のことです良人は妾に向つて

「ドーしたのだ。此二三日はどうも變ではないか。氣分でも惡いのか

「いーヱ夜會に往くのに。髮具や。指輪のやうな飾りが。一つもないから。それで大層心配して居ます。アーいふ處へ往つて。サモ貧乏らしく見えるのは否だから。モー往くのは止しましよう。

「ナーニ夜だから。そんなに眼に立つものか。銀座の勸工場へ往つて廉價ものでも見てお出。五六圓出せは買へるではないか。お前の美しい器量で大抵は瞞着かせるよ。

「妾はイヤです多くの貴婦人の中で。貧乏に見える程耻かしいことはありませんから

「何を馬鹿な……それなら早く芳野の奥さんの處へ往つて借りて來るが好い。アノ方はお前の親友だから搆はないだろう

「アーそうです。それは氣が付きませんでした。あの方は澤山お持ですから。借りて來ましよう

妾はやつと愁眉を開き其翌日になると。朝早くから芳野夫人を尋ね。そして自分の困難を打明けて此事を頼みました。夫人は化粧簞笥の引出を開けて。大きな寶玉入の箱を取り出し。其蓋を開いて妾に見せ。「どれでも氣に入つたのをお持ちなさいと。親切にいつて呉

れました

妾は先最初に瞥甲の櫛。珊瑚の根掛。ルービー入の指環。眞珠の帶上げ。金製の腕環などを見ましたソシテ一々之を身に着け。姿見鏡に寫して見て。ドレも皆欲くて離すことが出來ませんでした。最後に「まだお持ですかと問ひますと「まだあるけれどどれが貴女に氣に入るか分らないからと。不意に黒天鵞絨の箱に入れてある。美事な金剛石の首輪を見せられました。妾は直と動氣が致しまして。慄へながら之を取上げ首の廻りに掛けて。暫くは自分の姿に見取れて恍惚として居ました。ソシテ云ひ出し難いのを無理に耐へて「是れ丈け拜借が願はれましようかと。やつとの思ひで口を開きました。スルト夫人は雜作なく「ハイお安い御用です」といはれた時の嬉しさは實に天にも昇つた心がしましたから格別丁寧に謝辭を述べて。其の飾品を持て。一目散に驅け出して歸りました。

談叢

勇しき孝子（五）

松ヶ枝女史

知事の惠みにて凡ての便利を供せられてよりフェレブは一分も躊躇することが出來ませんでその日の夕方直ちに舟に行つて何時頃出帆かと船長に尋ねました「風がよいから一時間内には出帆する」といふ答にさらばとて、フェレブとメカエルは船の客室に入つて最後の時間を送りました遂に船長に促がされて止むなくメカエルは立ち上りましたが顔色蒼ざめて無言の涙は滴々彼が兩頬を傳ふて居ります惜別の情は盡きざれば思ひきつて「さよなら、何時か一度は來らんと恐れた時期が遂に來たのだ、大能の神がお前を守つてどうぞ荊棘も變じて薔薇となるやうに祈ります、それじや」と

云ふて幾度も〳〵フエレブを抱きしめて遂に小舟に移りましたフエレブも續いて飛び移りまして「父さん私は決して受た御恩は忘れませんどうぞ健全で餘生を送つて下さい必ず再會の期がありましよう」と言つゝ再び互に相擁してフエレブは本船にと歸りました小舟は岸の方にと漕ぎ行くに本船は順風に眞帆はらませ忽ち大海に乗り出でました

メカエルが海岸に立つて遙かに見ゆる白帆を眺め眼に一ぱひの涙を湛えさした時フエレブは船の客房にて獨り同じく別れを悲しんで居りました

翌朝フエレブが甲板上に來ました時には舟は早や遠くカンデヤの海岸を離れて船長は獨り煙草を燻らしつゝ安樂椅子に倚つて居りましたフエレブも傍に坐を取つて「幾日位かゝりましよう」と尋ねましたが餘り親しく感じない船長は冷淡に「アラーが知つて居るが私は知らん」と答ひました「それでも大抵の見積りは幾日位でましようか」「六日で着ひたこともあれば又時によつちや六週間もかゝることがあるし、どうして風がどつちに吹くか分りわしまいし、」と答ひました「それじやもし風が好いとすれば？」と重ねての問に「そんなことは「アラ」の外答は出來ない、風がよくとも外の故障が起るかも知れない、先づ滿足して運命の下に從ひなさい」との冷淡極つた答にフエレブは非常に悲しく思ひましたが靜かに振り向ひて遙かの海を眺めて居りました船長は矢張り煙草を吸ひながら船は「アラ」と水夫の手中に委かせて置きました一時間斗りの後フエレブは彼方の水平に一朶の白きものを見とめましたが雲とのみ思ふて居りましたに追々近づくを見れば一個の船躰ですからその旨船長に傳へました、船躰と聞て船長はいたく驚き急ぎ望遠鏡をかけました、「この危急の塲合に何しで居るのだ、ギリシヤの海賊が見える」と大音擧げて叫びました、今まで甲板上に横になつて甚

寢して居た水夫等も「海賊」と聞て猶豫がならじ直ちに船長の命令の下に船の進路を轉じて辛じて虎口を逃れました船長は少し優しき音調でフェレブに謝しましたがその動かない決心を詳しく聞えた時に堪え兼ぬるといふ風躰でフェレブの決定企圖の愚かなことを申ました樣々と言葉を盡してフェレブを伴れ歸ろふとしましたが金鐵よりも堅固な孝心いかで動かさるゝことのムいましよふ、斷じて凡ての誘ひを辭して八日目の朝遂にラデキアの港に着た時猶も切りに勸めらるゝを固く否んでこゝに船長と別れ愈々獨り伴なき旅に上りました

沙　漠

知事から受けた金を以て如何なる用意もすることが出來ましたから一頭の駱駝を買つて沙漠を超ゆるの仕度を志ました丁度ハレブからバグダドに向ふ隊商のあるを聞きハレブに行つて同伴を賴みました皆打ち揃ふて翌朝直らに出立志ましたが商人等は敢てフェレブに注目志ませんでした唯だその中の一人が「何故バグダドに行くのか」と尋ねましたが「親戚訪問の爲め」との答を得て安心して居りましたフェレブはトルコの衣服を着てよく似合ふて居りましたし他の人が跪いて「アラ」に祈る時は自分も跪いてその期を神に祈るの機として居りましたから誰も怪しむものがムいませんでした

ハレブの近隣に內亂が始まつたが爲め正路を取ることが出來ないで隊商は屈强の軍隊を護衛に雇ひスリヤの沙漠を通ることゝ決しました五六の市邑を通過して遂に沙漠にと參りますれば見渡すかぎり際涯のない沙の大海原が横つて居りまする一本の木一葉の草、青きものとて一つもないさてはこの寂寞を破るの生物の聲音も聞き得られませんたちまちにしてこの地方に名高き爆熱風犯し來つて人畜を木の葉のやうに卷き上げ卷き

去らんと致しましたから各々皆砂上にうち伏して危難を免れました頭から衣服を被つて各々熱心に「アラー」に冥助を祈りましたがフエレブも同じくうち伏してギリシヤ語で眞の神に祈りました嵐の爲め彼の聲は他には聲えませんでしたが傍にあつた一人の耳には入りましたフエレブが頭を擧げた時レオンテと云ふカンデアからの脱走兵が傍に居つたのを見て誠に驚き怖れました

レオンテはフエレブを見ましたが何も申しませんでした

やがて夕刻になりまして漸く一の「オアセス」(沙漠中にて水と草木のある處を云ふ)に着しました皆々喜んで喉を濕はし苦しき渇を癒やしました、フエレブも亦駱駝にも飲ませ自分も飲んで心地爽やかになりましたから泉の傍の木の根に腰かけて息ふて居りまするど背後に聲あつて「煩むべきかな主イエス」とギリシヤ語で申ますからすぐ受けて「世々限りなく」と應じながら振り返つてその人を見ますれば豈計らんやかのレオンテンでムいましたフエレブは思はず後ずさりして眞蒼になりましたレオンテは猶近づいて「安心なさい、あなたはキリスト教徒だが私の外に知る人はないもし、私の言ふことを聞くなら誰にも告げはしない」

「どうして私のことを知つて居るのですか、私はあなたに科はないからどうぞ向ふに行つて下さい、」

「はい、先刻からよく見貫ひて居りましたあなたは老人メカエルに養はれたフエレブ、メサロスで今両親を救ふに行く道でせよふ、私が一言、隊商の長に告げるならもうあなたの命はないものです」と嘲笑しながら申ました、實にどんなことを申出んも知れませんからフエレブは遂に「それじやあなたが私に用と云ふのは何ですか」と尋ねました、「一千兩出すなら誰にも告げますまい、」

さてこの一千兩と申は知事がフェレブに與えた總額でしたもとより知事の添書を以てバグダドの富豪の許を尋ぬれば入用の金子は如何程でも得らるゝ運びになつて居りますがどうして今知事の好意を空しく惡漢の手中に渡すに忍びましようフェレブは決心して云ひ放ちました「私はあなたの嚇に驚ひて信仰を曲げるやうなものぢやありません、隊長に告げたいなら告げなさい」

レオンテは怒りの面相あらはして「よろしい」と云ひ殘しつ行き去りました

さすがは未だ子供です、斯く云はれて見れば何やら心配になつて來ましたので誰か親切な人に相談したいなど思つて居るうち忽ち一隊の軍人が來つてフェレブを取り捲きましたレオンテもその中に見えました、引き立てられてフェレブは隊長アブダラの前に擲れられまするると隊長は嚴かに

「この脱走兵の告げにはお前はキリスト教徒なそうだと眞實か」と問ひかけました

「此奴は私を讒訴したのです千兩くれないと云ふて、だからどんな人物か大抵お分りになりましよう私に保護を與ふる土帝の押印書を見て下さい」押印書を見てアブダラはその疑もなく知事の手跡といふことを認めましたので非常にレオンテを憤り直ちに縛して鞭もてうち懲らせと命じました、然しレオンテは聲を限り熱心にフェレブの異教徒なことを叫びますから隊長は再びフェレブに問ふて果して異教徒か否やを尋ねもし果して異教徒でないならば隊長に續ひて「神は大なりモハメットはその預言者なり」と申せとたゝみかけられましたフェレブは蒼くなつて何も語が出でません自分の信仰を僞らんか將た又生命を失はんか一つ二つの境です、然し明瞭なる良心は遂に詐僞の手段を肯じませんフェレブは斷然思ひ切つて「私はキリスト教徒です

然しレオンテが告訴したやうにこの隊をアラビヤ人に賣り渡すなどの反心は聊かもありません、」
隊長は何故、異教徒のフェレブがトルコ帝の押印書それに又知事イブライムの手跡でバグダドのケレー、ベーに當てた手紙など所持して居るが不思儀に感じましたから侍臣を斥けて天幕を下ろし自分とフェレブのみとして悉しく事の始末を尋ねました聞てその孝心と勇氣と信仰とに非常に感じまして以後バグダドに到るまで必ず充分の保護を與ふる約束をしました、然しレオンテなどの手を免るゝ爲めにわざと命じてフェレブを縛させ始終隊長の眼近く置けよと兵士に令しました兵士は命令の下に忽ちフェレブを捕へて天幕より出で行きましたがレオンテは用ありげに逡巡して居りました
「何用があるのですか」と隊長の問にレオンテは得たりと
「反徒を見出したのは私です」と答ひました
「あなたはたゞあなたの義務をした迄のことと何の賞與が要さう、眞正のモハメット教徒の義務です、」と隊長に云はれてレオンテは齒を咬み足を蹈み鳴らして「皆が悔やまぬがよい、すぐに復讐してやるから」と獨言しつゝ天幕より去りました

アラビヤ盜賊

前回の出來事の後二日程は無難に過ぎました別にアラビヤ種族の襲撃もありませんから見張りの番卒も此度は災害がないのかと少し氣を弛めて喜んで居りました處が三日目の夕方遙かの方に塵煙りが立つよと思ふまもなく一群のアラビヤ種族が襲ひ來て先陣の護衞の兵士も立ち處に過半打ち斃され隊商の多くは無殘にも或は殺戮せられ或は奴隷とせられまして辛くも逃げ去つたは實に僅かでムいました
その大騷動の最中他の者は皆絕叫して哀願して居るにもかゝわらずフェレブは獨り騷ぎません、氷のやうな

白刃が頭上にきらめいても少しも驚きませんのをアラビヤの酋長は眼に留めて馬をフエレブの傍に寄せました、その鎖に繋がれて居るのを見まして

「誰が縛したのか」と問ひました、「私がキリスト教徒であるを以て隊商の長が縛しましたあれあの向ふに居る男が私を讒訴志ました」と云ひつゝレオンテに指さしました、酋長はうなづいて「あゝあの男は悪漢で誰をでも賣るのです、あなた方の隊伍もあの男の内通で私共に知ら志たのです内應した報酬を得らるゝなぞと思ふて居つちや大した間違ひだ」

「然しあなたは彼に報酬の約束をなさいま志たろう」と

フエレブが問ひましたに酋長は答へて「もとより約束の報酬は拂ひます然しあんな悪漢は生かして置くことは出來ない金は拂ふがそれと共に彼の生命は此ちに取り上げねばならない」

此の語を聞き居つたレオンテは殆んど狂する計り驚き悲んで命計りは扶けくれと歎願志ました

フエレブも取りなして呉れましたので酋長も然らばと云つて生命だけは宥るしてその代り終生鎖に繋がるゝ奴隷とすることにいたされましたアラビヤ賊徒は取るべきものを掠奪してその夜その住家なる天幕に歸りました後酋長は切りにフエレブの沈勇を稱しまして是非自分等の仲間に伍みし呉れと勸めましたがフエレブは己が決心の程を話して動きませんでした

レオンテは鎖に繋がれて最も難澁なる勞働をせねばならぬに引き變へフエレブは鎖も解かれて意の儘に天幕の出入を許るされ好遇せられて居りました

始めに酋長と固く約して酋長の許可がなければ決して逃亡しないと申ましたから時には幾多好機會があつて誘惑が大なりしにも拘はらずフエレブは己の言葉を立てゝ忍耐して居りました、然し固とより樂しきことは

ムいません日々鬱々として經過しました斯くて二年ばかり經て或る日フエレブは獨り天幕の外に佇立して居りまするど後ろの方で微な聲がして自分の名を呼びますから振り向けばレオンテです、誠に憫然な面相を作つてフエレブに「どうぞ向ふの木の蔭まで來て呉れ」と申ますから從て行きまするとレオンテはフエレブの足下に伏して「疾くより祈つて居つた好機會が遂に來ました私はバグダドに行く道をよく知つて居りますから早く私の鎖を解いて下さい向ふの木の根に繋いである一頭の駿馬にうち乘つて早く此處を退ふじやありませんか」となほ樣々よき事をならべ立てゝフエレブを誘ひました然しフエレブは「私は酋長に約した言葉がある、よしや死んでも約した言語は破りません、敵にたりとも一旦約した上は私は及ぶ限りの忠勤を盡して唯だ運の來るを待ちましよう」と斷然言ひ放つて行き去ろふとしまするど豈計らんや酋長は何時の間にか木の蔭にて二人の對話を聞き居つたのでした

歩み去るフエレブを抱き止めて「あゝ實に珍らしい靑年だ立派な性質には實に感じ入る、あゝどうか私の兄弟となつてこの凡ての寶物の半ばを分つて互に樂しく暮らして呉れないか」と切りに望みましたがフエレブは固く辭して聞きません

その夜、酋長は部下を集めて會議を開きフエレブのことを悉しく物語つてフエレブを解放することの可否を訊しました、滿坐異議なく解放に讃成しましたので即ち酋長は直ちにフエレブを己が部屋に呼んでそのことを告げましたその夜のフエレブの喜悦は如何でしたろふ、誠に眠ることとすら得ない程でムいましたろう、翌曉酋長は一頭の駿馬をフエレブに餞げました五六の部下に命じて途中まで送らせましたが別れに臨み皆懇ろに別を惜み豐かなる「アラー」の祝福をフエレブの爲めに祈つて別れました

さなきだに名高きアラビヤ種、况してや酋長が撰んだ駿馬でムいますからフエレブは一鞭あてるや否恰も空を飛ぶが如くにかけ去りました
萬事幸なる風向きよとフエレブは實に喜びました

狐のレイナード（一）

勝間禪夢

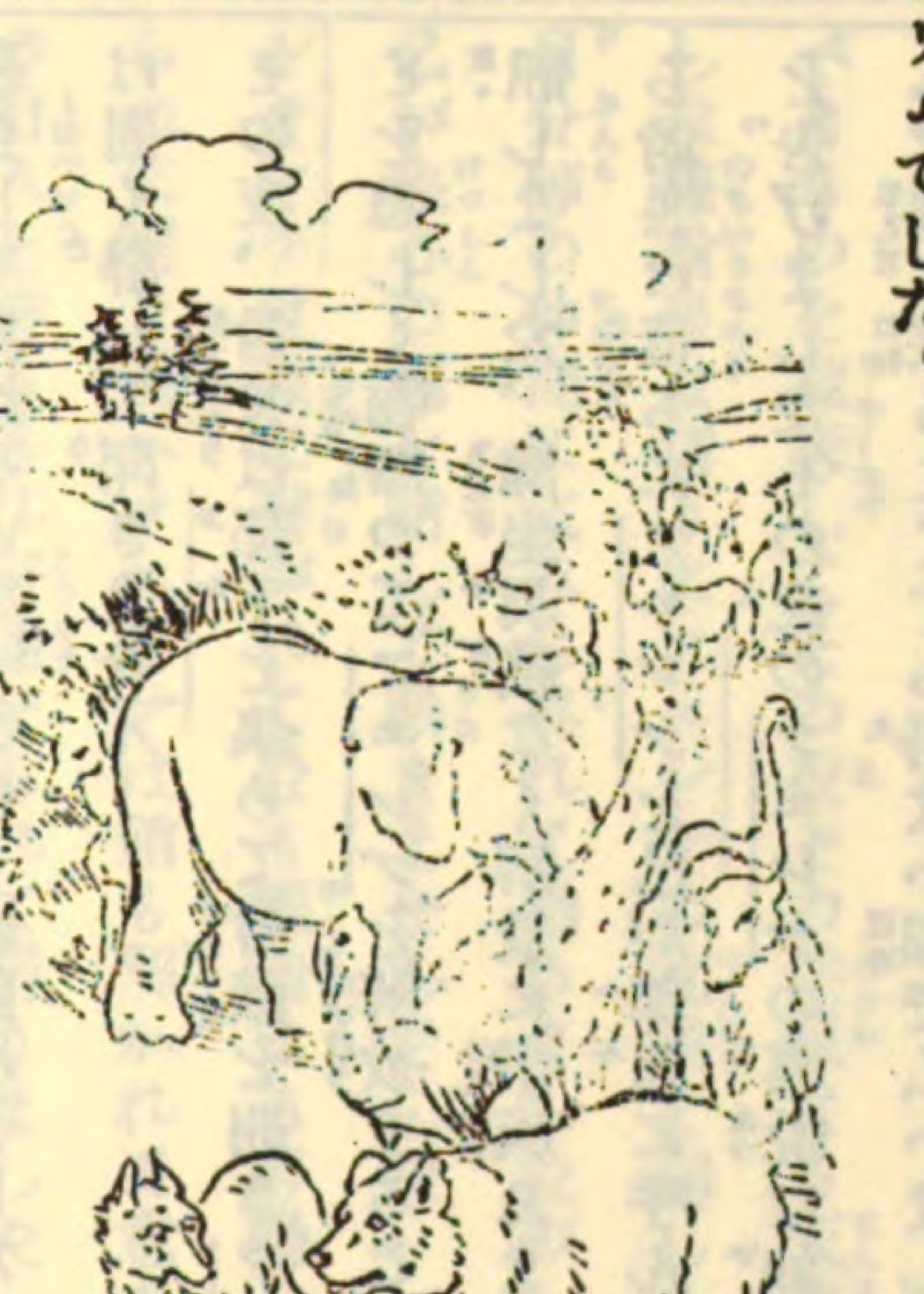
或時禽と獸の社會に法廷が開かれました、獸王の獅子が嚴重な召喚を發した所で、直ちに方々から諸の禽と獸が集りました。

召喚に應して集つたものゝ重なるものは、ブルインと呼ぶ熊、イスグリムと呼ぶ狼、ヒンツと呼ぶ野猫、レーンプと呼ぶ狸、其他凡て來集したが、たゞ狐のレイナードのみは何故にか來なかた。

獅子は法廷を開き宣告を言ひ渡さんと裁判席に座して居る、諸の禽獸は宣告を聞かんとぐるりと獅子を取り圍んで耳を傾けて居ります。

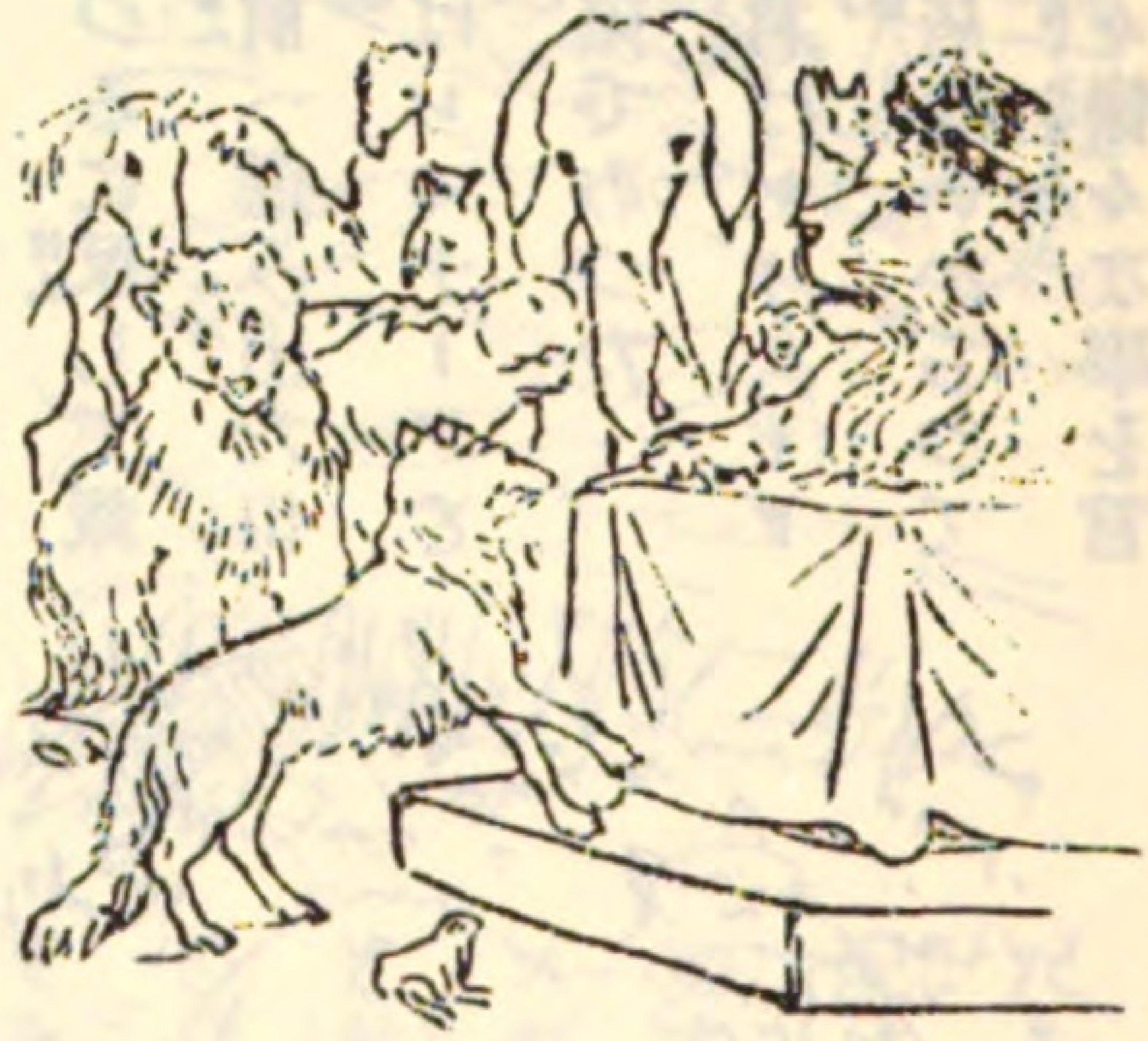
其法廷は通常よりは餘程樣々な告訴があります、それは大低狐のレイナードに係る事件です。

第一番に裁判官の方へ身を顯はしたのは、狼のイスグリムでした。



狼「閣下、レイナードほど、實に、實に酷い奴はありません、もう〳〵彼奴には懲々だ、つい過般の事です、私の不在の間に彼奴が還つて來て、私の妻を酷い目に合はした上、あの太い尾で私の小兒等

に砂を浴びせかけたから、大事々々の三人は到頭〳〵
盲目になつちやつた、彼奴は實に虚言者で、彼奴
の言ふ事は一つも當になりません、閣下、どうぞ
宜しく御裁判を願ひます。



と狼が辨終るや、
「さうです」その聲
と共に起つたは
豹。

豹「イスグリム君
が言ふ通り彼
奴ほど酷い奴
は世界に二人
とはない、實に酷い、彼奴の爲め老衰たレーンプ
（兎）は大災難を受けたといふ譯は、レイナードは
レーンプに祈禱を敎ゆると欺して内から道傍へ連
れ出したので、レーンプはそれが身を亡する策だ
とは知らないで、其言ひなりになつて外へ出ると、
急に飛びかゝつて一縮になつてるレーンプの首玉
にくらひついて噛み殺してしまつた、我輩は丁度
其前を通りかゝつたが悪くて〳〵仇敵を取つてや
らうとまで思つた。



此語につぎて犬は
起ち上つた。

犬「さうとも〳〵
其位の事はし
かねない奴
さ、彼奴は私
が晝飯の用意
に藪の後に隱して置いた臘腸をどう目つけたか見
つけ出して食つてしまつたよ。

野猫のヒンツは犬の言の終るを俟たず
イヤ閣下、其臘腸は私のです、實の處を申します

と、私は人の居ないのを覗つて水車小屋へ行つて、其家の棚にあつた、たつた一個盜つたのです、それを彼狐にしてやらました

野猫の話が切るゝと直ぐに貉のグリムパードは、一同が、レイナードの罪を數え立つるに反して裁判長の前へ進み出た但し此貉はレイナードとは從兄弟であつた



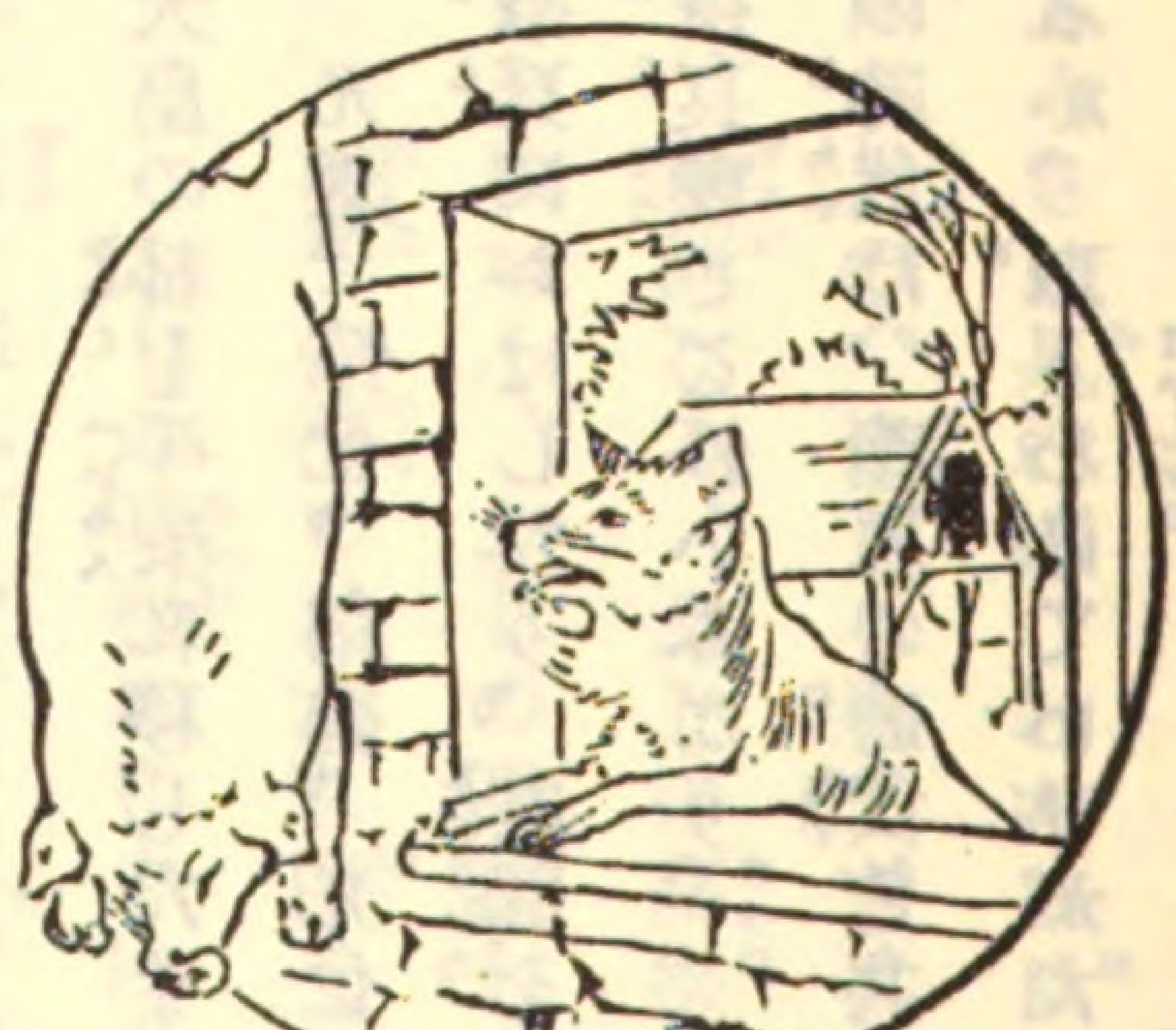
諸君はレイナードか居ないからつて種々樣々な事を言はるゝが、決して實際はそんなものでもない、從兄弟だから最負をするではないが、彼も存外正直者だ、イスグリム（狼）君は此處に居るやうだが構はない、これから彼がイスグリムのため酷い目に遇つた話をしやう、あのイスグリムといふ先生は實に狡猾て貪欲だといふことを、レイナードは知らないで、一度同伴に歩いた、所が腹がひもじくなつたので、どうしやうかと首を傾けて居たが、丁度前面から魚類を澤山積んだ車が來かゝつた、イスグリムはそれを欲しくて耐んない、だがどうしてそれを取らうといふ方法がないのでレイナードを回顧ると此方はよしと言つて、車の來る道に進んで、全然死んだやうな有樣で、兩眼を閉ちてさ、呼吸を凝らして倒れて居た、すると車を引いてる人が來かゝつて、ほう、此處に狐めが死んでらあ、と言つて舌をべろりと出して假死をしてゐるレイナードを引つつかんで差し上げ、後の魚類の積んである車の上へ投げ込み、ずん〳〵車を引いて行つた、これは市府へ出て革屋へ賣に行く所存だらうさ、所でイスグリムは車の後からせつ〳〵と駈

けて行く、レイナードは後脚で魚類を刎ね飛ばし、もう澤山だと思つた頃車から飛び降りてイスグリムの側へ飛んで行つた處が、イスは十分食つたと見えて腹をふくらしてゐる、それでレイは倚更ひだるくなつて、己の分配はどこへあるかと尋ねたら、どうだらうイスの言ふこと、こゝにと彼奴が指したを見ると、何だ骨ばかり殘つてあるので、レイナードもあきれて物が言へずにゐると、お前にはそれで澤山だ、非常に旨いものだよ、と言つて逃げて仕舞つた



獅子はさうかと鷹揚に答へ、まだ外に何かあるかと問ふた、貉は一層得意になり

有りますとも〱、いつかもイスグリムと百姓屋へ行ッたら、素より其朝豚が殺れたといふことは知つてそれを盜らうと相談して、二人で其家の窓から覗き込んだら案の如く豚が木の釘に吊されてゐるので、レイナードは窓から飛び込んで、豚に飛び上つて木の釘諸共引き拔いで窓からそれを投出して、外の窓から逃やうと庭に飛び下りると、犬小屋から三四疋の犬が吠えついて追つかけたので從兄は命から〱逃げ延びて、こつそりイズグリムの所へ歸へて來たら折角千辛萬苦命賭の仕事をして取つた豚は狼に食つてしまはれた樣子だから、レイも非常に怒つて、



此方の分配はと詰つたら、イズ奴、あゝ此處にあると木の釘を出した

貧窮

炊ぐべき米、盡きては、立つべき烟の末、心ぼそくおぼゆる朝もあり、たく柴のたえぬれば、ほかげだに立てあへずして、さびしく過ぐる夕もあり、燈火の油つきぬれども、あつむべき螢の節も過ぎ、つむべき雪も、いまだ降らねば、なり／＼に買ぶ時もあれど、信濃酒の濁りて、その味、そこなひたり、されば醉心地に、身の憂を、忘るべくもあらず、魚は、その鮨をだに、見しこともあらねど、野菜は、山里のかひに、種々おほかれども、みづから耕さず、くろゝ人もなれば、二月の殘りの雪かきわけ、野澤の芹など摘み來て、飯のあはせものには、するなり、衾は、破れちぎりて、夜風身にしみ、衣はふるく、かつうすければ、朝夕、ひやゝかなり、たゞ幸なるは、劍にいまだ錆をおびざるあるのみ、かくばかりなれど、猶かのから人のいひけむ、四の友あらまほしくおぼゆるに、硯は瓦なれば、思ふまゝに墨もすりがたく、筆はちぎれて、文字の顔、老ひきらぼへるに似たり、紙はしば／＼盡くるまゝに、反古といふものゝうらを用ゐ、机は童子の手習に、きずつけたるなかりたり、かくもなほ思ふ心を書きあらばすに、こと缺くべくもあらねば、四の友には足れりとや言はまし、たゞかの烟の、なり／＼、絶えぬるなば、いかゞはせむ。（堀秀成）

群書解題

萬葉集

欲東老人

桓武天皇の都を平安に移したまひし以前、元明、元正、聖武、光謙、惇仁、稱德、光仁、凡て七代の其間、續いて奈良におはしたり、其間を史に稱して、良奈時代、或は奈良朝とこれいふなり。

奈良の時代は、藤原の時代と共に、いつれまされるか、劣れるか、取りわけていひがたき盛代なり。濟々たる多士、一時に蜚出して、ともに特得の長をふるひ、赫ゝたる名を今にとゞむ。最澄あり、空海あり、眞備あり、仲麿あり、人麿あり、黒主あり、家持あり、旅人あり、皆これ不出世の英才なり、其一のみあるも亦其

時代を飾るに足る、況してや斯くの如くこれ多き、實に盛んなりといふべきなり。

されば、文學に、宗敎に、美術に、大ひなるものを殘したる、千歳の今、人の寳としておほくところ、いづれにか之れ、おろかなるある、我れ一々についていはんと欲す、されどそのこと今は叶はず、玆にはたゞ其の文學の大奇寳萬葉集についてのみ、いさゝかこれを語るべし。

萬葉集の撰者については、古來其說一つならず、されど橘諸兄朝臣の撰といふこと、尤もたしかなる說なり、上は御製より、下はたきゞとる賤山がつ、或は藻汐かく海士が子までも、其人の品によりてこれを捨てず、其頃の名吟秀逸、ことごとくをさめつくしたり、長歌短歌其數すべて三千三百十三首、種々さまざまの體そなはる、柿本人麿の長歌、山邊赤人のみじか歌、山上の憶良の挽歌など、雄大壯大、古人の擬し能ふところにあらず。就中山邊赤人が富士山のうたの如き、實に〻名吟なり、

あめつちの、ひらけし時ゆ、かんさびて、たかくたふとく、駿河なる、ふじの高根を、天のはら、ふりさけ見れば、わたる日の、かげもかくろひ、照る月の、光りも見えず、とぶ鳥も、いゆはゞかり、駿河なる、ふじの高根を、かたりつぎ、いひつきゆかん、ふじの高根を、

田子の浦ゆ、たち出てゝ見れば眞白にぞ
ふじの高根にゆきはふりける

吟し去り吟り來れば、ふじの根のいよゝ高きとおぼく、想の共に高きとおぼゆ、また、

よる光る玉といへども酒のみて、
心をやるに豈しかめやも

などの如く、詞自在に言ひ出せるあり。

然して其うたのいづれも、いはゆる萬葉假名といふに

て書かる。そもそも其頃に於ては、いまた半假名といふものなく、むつかしき漢字の音訓、たくみにもちひて言を綴れり、即ちあすかの宮といふべきと、明日香の宮とかけるか如し、故に今よりこれを見れば中々にしておかしきことあり、十六とかいてしゝ、蚊聲とかいてぶん、馬聲とかいてひとよませるなど、なほなほ外にも多くあり。

殊に、莫囂圓隣とかいて、あまのかぐやまと讀ませるなど、其中の尤もおかしきものなり、かゝる書方、これを名して戯訓といふ、其他明日をあす、今日をけふと讀ませるなど、これを義訓といふ、なほ、借訓、略訓、義訓、約訓なといふ書きぶりあり、全集ことごとく漢字ばかり、然して優美なる倭歌をかける、書きにし人も、蓋たし大ひに悩みしなるべし、されど後世に於てこれを讀み、これを講じ、これをならふもの丶困難それ一方にあらざるなり、さるを徳川の時代、様々の學者出てゝ、研究縦横、到らざるなく、ことごとくこれを假名に直し、或は傍訓をほどこして、これを我等に殘したり、されはこそ吾人今にありて、この大奇寶の眞價を知り得る、まことにまことにたゝへつべきなり。

幸ひに斯ることあり、故に讀むに苦しからず、苟くも和歌の道にあそびなんと思ふものはついて讀むべし。古今集或は拾遺集、後選集などの如く、細工づくめのものにあらで、一々歌の眞なるもの、この書を繙き見ざるもの、よしや其他に於ける歌集これをあさりつくせるとも、決して歌を知れる者といふべからず、諸子漸を追ふて必ずよめ。

注釋の本、甚はだ其數多しといへども、或は密に過き、或は粗に過ぎ、其中を得たるもの誠に少なし、たゞ橘千蔭がものせし、萬葉集略解初心によろし、活版本にて多くあり。

近着紹介

千代田城大奥　日本橋區通三丁目 林平次郎發行

本書は曾て朝野新聞記者たりし永島、太田の二子が苦心經營の末、遂に此編を成せり、即ち千代田奥向に於ける男女諸役の進退、萬般の儀式、禮節、服裝、慣例、習俗、建物の結搆及裝飾等を最も正確に最も細密に記載す、二子が天下の一大秘密たりし大奥の狀景を探知闡明せるの功亦沒すべからず、此書の價値已に定論あり吾人は版を重ぬるの多きに遭遇し未知の人に紹介の勞を取らんのみ（上下各定價三十五錢）

家政

料理一二三品

◎生芋の三ばい酢　今はなけれど以前萬代橋邊に萬代軒といふ料理屋ありたり、其家の自慢料理に食はするもの頗る人口に適す、そは生芋を三ばい酢にて食ふ料理にて、里芋をば生のまゝ薄く切り（一分位）之を鉢に入れて暫時水に浸し置かば粘汁の出るを待ち、其水をこぼし更に水を二三度そゝぎかけて其粘汁を去り、悉く水をこぼし尚ほ芋に粘汁のつきをるものを布巾にて拭ひおとし、之にざつと鹽をふり、三ばい酢にて食せば一種の趣あり素人の家にて製し易き料理法なり

◎茶雜煮　これは切餅を焦げつかぬやうに燒き、茶碗に入れて適宜に鹽をふり、其上より濃く煎じたる番茶をかくれば、即ち茶雜煮が出來るなり、ちよと面白し

◎よせ鍋　よせ鍋を料理屋にて注文すればそれこそいろ〳〵の料理の種をつかひ體裁も美事なれど、素人の家にては容易ならず、併し寄鍋とて必らずしも新銀杏、むすび海老などにも限らず、里芋にても菜葉にても牛蒡、大根にてもよし、八百屋にて容易に買ひ求め得ら

る丶ものをよき程に集め、之に魚類を加へ（此節流行のむつ魚などよし）煮方は矢張寄鍋のやうにし、鍋にかけながら食すれば頗る暖なる料理となるなり

◎棒だら　鱈昆布の吸物は普通の仕方なれど、これは餘り平凡になり了れり、それよりも能く水に浸して鹽氣を去り、味淋と砂糖をかたせて煮つけにするかたよし、たらでんぶの仕方は水につけ置き小く切りて細くきざみ昆布を短く切り、共にまぜて煮て、之に梅が香を十分かくる

◎鹽鰯　の大根おろしなど面白ろき上に必らずしも下品の料理にあらず、其法は能くあらひ引き裂きて、かしらと骨を去り大根おろしに酢ばかりかけて食膳に供す、鹽鰯とて無氣に輕蔑すること勿れ、近來之を燒物として會席の膳部に見ることもあり

庖厨雜俎（其二）

想哉

(4)牛乳の防腐法

時候漸々暖くなれば飲食物の腐敗すること甚だしきものなり殊に牛乳の如きは早く腐敗に傾くものなれば其防腐法を心得置かば極めて調法なるべし牛乳一舛に水揚酸二分五厘の割合を以て加へ能く攪き交ぜ置けば三四日は敗腐することなし何となれば水揚酸は醱酵を制止するの性あるものなればなり然し水揚酸は鐵に觸るれば茶褐色を生じて牛乳に變色を來すことあれば成るべく罎及び陶器に容れて此法を行ふを冝しとす

(5)鹽漬物の鹽分を去る法

魚類及び野菜類にして鹽漬のまゝ食すれば其味極めてまづき物あり故に斯る物は先づ鹽拔きを爲して後、味を付くるを冝しとす其法は總て鹽漬の物を湯煮にし清

滌に洗ひたる海綿を其中に挾み置けば海綿は能く鹽分を吸收して漬物の鹽分全く去るべし然し魚類にして湯煮をなせば原味を失ふの恐れあるものあり斯るものは先づ其魚類を能く洗ひ而して豆腐滓(俗にうの花と稱す)を上下に詰め少し壓し置くこと四五時間もせば鹽分は全く去るべしかくして更に生魚の如き割烹法を行ふべし

(6) 生肉の貯藏

生肉に水揚酸を塗擦するか又は水揚酸飽和液にしたすこと二十分間ほどにして能く之を乾燥し貯藏せば三日間位は決して腐敗することなく尚ほ二週間位も貯藏せんと欲せば水揚酸飽和液を攝氏寒暖計六十度に熱し少し冷やしたるものに生肉を浸漬すること二十分間にして之を取り揚げ全く冷却せしめたる後、樽詰となして壓し付けて固く封じ置かば腐敗することなし

序に記す我邦にて水揚酸を用ゐて飲食物の腐敗を防ぐことは嘗て大學醫學部雇敎師たる「オスカル」氏に始まり氏は我邦醸造の酒類の能く腐敗するを聞く水揚酸を用いしことあり爾後防腐劑として種々の物に應用するに至りしなりと云ふ

家內經濟(一)

(一名簡易生活)

◎昨今は餘寒嚴烈最も炭火を要する時節なり、たとへば夏季一俵の炭を要する家にては、三俵の炭を要す、而して昨冬より諸物價の騰貴につれ炭の如きも非常に暴騰し、家に大小により夫相應に臺所の費用嵩みたるが、土竈の炭は燃え易き代りに忽ちにして灰となりて頗る不經濟なるが、早く燃え立つを防ぐため、炭入に出したる炭に水をかけつかふも一の經濟なるが炭入は箱製なるべし、罐製にては宜しからず、惣じて土竈は火種をつくるために用ゆるは宜しけれど成るべくは堅

炭にするが儉約なり、堅炭は火の保よきのみならず、火の不用となりし時消すにも便なり。

堅炭よりも更に儉約なるもの世に出でたり、これは入山石炭と稱し全然石炭にもあらねども、之を火鉢レ中にても能く火の活ることと堅炭と異ならず、石炭又はコークスはストーヴ又は風呂釜等には用ゐらるれども、火鉢の中にては用ゐがたし、然るに此入山石炭は火鉢の中に燃して堅炭と異らざるのみならず、石炭の如き一種の臭氣なく火力はコークスと同じき効あれば、物の煮沸は堅炭よりも半分の時間を要せず、又風呂釜等に用ゆるも大によし、價は一俵二十五錢位にて四十錢の堅炭一俵半乃至二俵を燃す位に向く頗る經濟的なり



火を埋て火種を絶さざらんことを欲すると、炬燵の火は團炭かさくら炭に限ることは誰も知る處、併し火力は薄し

◎竈下に用ゆる薪は堅木を宜しとす松薪のやうなる柔なるものは、甚だ不經濟なり、併し火消壺に焚殘炭を取らんとならば、松薪に限るなり、而して風呂の鐵砲釜にもこれに限るなり、堅木も多くとも細木は不經濟、成るべく太くして堅きを擇むべし

◎錢湯は簡便なれども此頃のやうに物價騰貴し、東京

市内大人一錢五厘小兒一錢三厘赤兒一錢となり、大人一度ならば左程家政の會計に影響なけれども多人數の家庭二日越に浴湯するもなか〳〵の事にあらず、それよりも家に据風呂を設くるかた方法によりては經濟なり、それも五人以下にては得失孰れか知らねども小兒多き家又は多人數の家庭にては一個の風呂あるかたよかるべし、今玆に夫婦二人、小兒三人、下婢一人都合六人の家族あらんか、錢湯ならば七錢五厘の湯錢を要す、若し据風呂にせんか七錢五厘の薪を燃さば十分浴せらるゝに至るべし、其上近所の知己友人にも浴せしむべし、其上清き湯は汲みて雑巾がけの用ともなり、浴後の殘湯は洗濯の用を爲すなり、六人の家族にても十人にても二十人にても薪の代と手數の面倒とは差して變ることもなければ、多人數ほど經濟なり。



小兒によりては多人數混雜する錢湯を恐れいやがり、之がために浴湯せしむることも等閑となり偶々病氣の源となることあり、かゝる小兒ある家庭にては倘更据風呂必要にして、必らずしも大人用の風呂を据えつくるに及ばず、六七歳以下の小兒を浴せしむるやうに出來ある風呂を求むるか、又は適宜に注文して製作せしむべし、これは大人の腰湯などにも差問なく至つて便利なり

目下大人用据風呂は五圓乃至六圓（鐵輪、赤銅鐵砲風呂）小兒用三圓乃至四圓位にて求めらる

夏は据風呂は一層經濟なり、何故なれば夏の水は朝汲み置かば夕方には自然に微温湯のやうになるゆゑ、用薪は冬の半分なり

炭を用ゆるは風呂を損傷せざれども、松薪を用ゆるかた儉約なり、松薪を二つに切りたるものを用ゆべし



天氣豫測法

天然の徴候により天氣の變化を豫測する法なりとてボストン、トランスクリプト新聞に載せたり

（一）日出の際多量の暗雲西空に現れ其儘留まるときは當日雨天と知るべし

（二）日出の際暗雲太陽を蔽ひ且つ西空暗淡たる時は雨天と知るべし

（三）日出の際太陽灰色（青白）を帶ぶるときは當日中に雨降るべし

（四）日出の際太陽霽れ其後雲に蔽はれ後ち晴るゝ時は夜に入る前に雨降るべし

（五）日没の際天空赤色を帶ぶる時は翌日好天氣と知るべし

（六）太陽赤色を帶ぶる時は晴天の徴なり

（七）夕陽赤色を帶ぶる時は晴天の徴なり然れども天空高く赤色を帶ぶる時は風雨の兆と知るべし朝の間に於て殊に然りとす

（八）日没の際東空に濃赤色を帶ぶるは暴風の兆なり

(九)夕陽多量の暗雲に蔽はるゝは翌日雨天の兆なり

(十)夕陽濃黄色を帯ぶるは風の兆にして灰黄色を帯ぶるは濕天の兆なり

(十一)夕陽灰色(青白)を帯ぶるは翌日雨天の兆なり

(十二)太陽の周圍に生ずる日暈は暴風の兆にして最も照り輝ける方面より三日以内に暴風襲ひ來たるべし

(十三)不耳の天氣中に日暈を見るは好天の徵なり

(十四)黄霧朦朧として西空に紫色を帯ぶる時は晴天の徵なり

(十五)太陽格外に照り輝くか若くば好天氣中の日暈を見る時は雨天の徵と知るべし

(十六)太陽の周圍に一抹の黄霧を見るは最風の徵

(十七)旭日雲間を透して強く照す時は午後に至りて雷雨起るべし

(十八)太陽灰黄色の瀕光を高く反射する時は風雨の徵と知るべし

(報知新聞)

内職案内

手柄の編物

此の内職は絹糸を以て手柄に用ゆる布を編むものにて、その編方には普通のものゝ外、七子形編、一松形編、又は縞模様の編方等數種ありて之に要する器械は唯だ二本の鐵の編棒さへあれば事足り、殆んど毛糸を編むと等しき方法たり、熟練するまでは隨分困難なれども大抵一ヶ月位見習に行かば、如何なる者も一通は覺え得るといふ、編賃は通常のものにて手柄十枚拾錢、七子形にて十枚拾七錢、一松形にて十枚二十錢等とす、同じ品にても腕の巧拙により賃錢にも高下



ありて一概には云ひ難けれど、凡そ一日拾錢以上拾五錢位迄は得らるべし、此の編物は面倒を厭はず丁寧にさへ造らば多分の金高をも利し得られ、且つは餘の製造品と異り頗る奇麗にて柔軟なるものなれば、手を痛め又は疊を汚すの憂なく、形積小にして嵩むものならねば取扱ひにも極めて便利なり、十二歳以上の女子は誰にても見習生と成り得れば餘暇ある婦女又は業を尋ね居る人は早速試みては如何、婦女子には最も適したる職業なり



社交一斑

流行の栞 ・流行子

一種の羽織

此ごろぼつ〳〵目につくは絹綾セルと羅紗の羽織なり、セルの方は袷に仕立て甲斐絹の裏をつくれど羅紗は一重にしてすべりだけ甲斐絹を附て、色は紺、黒、鐵色最も流行し、羅紗の霜ふり偶々目にとまり茶セル、茶羅紗は老人を見受けらる、呉服屋につき價を問へばセルにて五圓より七圓、羅紗にて十一二圓なるよし

半襟

半襟の流行は昨冬詳しく記し置きたるが此頃見受くる處によれば普通の刺繡の外、金糸銀糸を縫ひ混ぜたるもの、無論縮緬にして色は

榮樸壁風第一等の流行

◎甲津學舍　簡易商業學科及女子點茶、挿花、禮法等を教授するの目的を以て今度日本橋小網町に設立したり舍主は松井廉氏

雑録

あんさん

清松

元祿の頃、天野桃隣といふ人あり、松尾芭蕉が門に入りて、俳名一時に高かりき、或年の夏の最中、江の島に詣つる途中、藤澤の驛に於て一宿せり、旅のよそほひ皆とき捨て、湯あみ終りて打くつろぎ、一人その部屋と極まり處にありて、旅の心なとかんがへ居しに、主人なる人いり來り、誠に誠に、ぶしつけなることにしあれど、苦しきまゝにこそ申すなり、妻にて候もの昨日晝すぐる頃はひより、産の氣つきて、しきりにきしり候へども、如何にせしやいまだ生まれず、日は日もすがら、夜は夜もすがら、苦しみなやみて今に至れり、されば此わたりなる醫師、二人三人むかへ來て、さまざまに手を盡し、品を盡くすも、更にさらに其甲斐なく、唯々苦しむばかりなり、もし此まゝにしてうちすごし、今宵さへも生まれずば、妻なるものは惱み死やせん、さて如何にせばよかりなんと、心も心ならざりしを、不思儀にも御坊のとまりたまひしこと、まことにたふときことゝなりけり、願はくは慈悲弘大の御手をもちて、何とぞやがて安産せんやう、一邊の御祈禱なし下されなば、何のよろこびかこれに若くべき、願くば御坊このこと御かなへ下さるべしと、宛然に泣かんばかり、ひた賴みに賴みたりけり、逐一を聞く桃隣、さては我れを、行脚の僧と間違へしか、われ髮を剃り、頭をまろめ、また法衣さへまとひしかば、然か思ひなすも無理にあらず、されどわれ、經文さへも知

らぬ身の、何とて祈禱祈禱などの出來得べき、されども斯くも詞切つに賴みなすもの、我れ能はずといふて退けなば、如何に恨みなさん知るべからず、さればよし、何にてもあれなし見んと、私かに心に思ひさだめ落つける面もち、主人にむかひ答へていふ、そはまことに心苦しかるべけれ、さひはひ我れに奇法あり、やがてそを得さすべしとて、をき直ほりて床の間の方にむかひ、何にやありけん口の中、呪文の如きものをとなへ、やがて矢立の筆とりだし、きり紙のはしに一首の發句、(とく出てゝ、またをと見せよ、花の兄)といふを書きつけ、さればこのありがたき奇法の御符、これを得さすべければ、急ぎ持ちゆき、汲みたての淸き水をもて、產婦にあたへ飮ますべし、されば如何なる難產なりとも、などかやすく〳〵と、產みおほせざることのあるべき、主人心やすく思ひなせよと、いとものものしげに語りければ、主人なん淚を流してうち喜び、

やがて手にさゝげもちて出で行けり。かくて桃隣は、さて如何にあるべきぞ、もし幸ひにして產まればよしされどもし、然らざる時には、我れ何といふて答ふべき、さればよしなきことをしてけりなど、心今更にいと苦しく、兎つおいつ、思ひぐして居たりけるに、主人なん又々いそぎ足に出で來りて、禮いともいともうやうやしく、御坊何と申し上げてよろしきにや、その言葉さへも知らぬまでにはとうれし、さてもさても大奇法、今更の如くにありがたけれ、いたゞきまいらせしかの御符、おほせの如くなして與へければ、見る見る內になやみとけ、忽ちにして產れ出たり、然かも玉の如き男兒、いとやすやすと生れ出てたり、誠に誠にありがたけれ、その喜びのしるし、心ばかりの御もてなし、願はく打とげていとゝ多く卅いられよとて、數をつくしたる珍味、いと叮嚀にもてなしつゝ、又主人なん願ふやう、御坊此上には、何卒生れ出でし彼の

子、よき名を撰びたまはれかし、されば此子一生の、まもりにも亦なりなんといふに、桃隣されはとて、さきによみ出でし發句にちなみて、梅太郎と名づけ與へたり。

唯々やすやすと生ませたまひしのみにあらず、斯くの如く名さへもつけてもらひし此子、後年のさきはひ、今より思ひやらるると、家内のたれかれ、みなみなともに語り合ふて打喜ぶに、桃隣はいよいよわれは顏に打すまし、なほさまさまのことなどかたり、其夜もやかであけたりければ、やをら思ふ方に立出て行かんと、昨日の如く旅裝とゝなへ、いとまを告げゝれば、主人これをしひてとゞめ、せめては今二三日ゆる〳〵逗留なさしめたまへ、ひらに〳〵にとてはなさゞるに、さらばとて、又々其後二三日玆にとまり、いろ〳〵のもてなし、餘る方なくつかれをやすめて、其後にこそ出て行きしと、おかしきことのかぎりならずや、俳人の逸話かゝることと他にも多はし。

京人形

小西來山

西行法師に銀の猫を給ひけるに門前の童子にくれて通りしとかや、いはくぞわらめ我は洛にて陶物の人形にあひ懷にして家に歸り晝は机上に居えて眼によろこび夜は枕上に休ませて寐覺の友とす世を見れば畫本達磨など崇がめて科ぬなき身を白眼つめらるゝよりはるかにましてんや物いはず笑はぬ代りには腹たてず悋氣せず蚤蚊の痛み覺えねばいつまでも居住ゐを崩さず留守に待つらんとの心遣ひもなし、酒飲まぬは心うけれど

さもしげに物食はぬはよし白き物塗らねばはるげることとなし四時同じ衣裳なれども寒暑を知らねば此方氣のはることと更になし夏はむかふに涼しく撫るに心よく冬は爐のもとを許さねばよい加減に暖かなり女の石になりかたまりし例を思へば石が女に化すまじきものにもあらず千歳を經とも變るまじき形親はいづくの土工ぞや出所を知らずあらうつゝなのかたらひやな。



雨谷一菜庵著◎永井鳳仙挿畫（大判折込口畫入）二月三日發賣

大石良雄

寫眞●萬松山泉岳寺山門
銅版●仝寺内義士墳墓
紙數四百十九頁
定價金三十五錢
郵稅金六錢

年寒ふして松柏の操を知ると。今や大石良雄に於てこれを見る。彼は平日に於て平凡の士たりしなり。否啻一個平凡の士たりし而已に非ず。上君公より下彼が同寮諸士に至るまで。實に痴鈍を以て彼を見たりしなり。去れど國難俄に至るの日に際して。彼は彼が本領を發揮せり。彼は忠誠なる一士として、勇偉なる傑物として、神算偉略ある巨人として起てり。彼は如何に復仇の大義を絶叫せしか。彼は如何に其方略を運らせしか。彼は如何に之を實行せしか。苦心經營其間實に二星霜。雪夜同志四十六士と共に吉良羽林翁を其邸に斫つて。身は潔く國法に死するに至れる大快活劇は。今見る如く著者が宛轉自在の彩筆に因つて描寫せらる。論評簡明事實周到精細。蓋し近代の好著なるを保す。

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　民友社

（明治廿五年九月十四日遞信省認可）



○小兒○はよく肥へて笑ひ顔の愛らしき筈のものなり痩せたる小兒は興味尠きものなり之れには彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸とを配合して飲み易く且つ味ひよく製造したるスコット乳菓が最も適當なる食料にして忽ち肉を肥し發育を助くるなり●此の乳菓が滋養分に富むとは他に比類なきが故に虚弱なる人々は之れを用ゐて奇効を見べし

特に虚弱なる婦人は一度之れを服用せば忽ち健全なる身躰となること疑なし

○咳嗽及風邪○は病の初めなり、次に來るものは肺の衰弱にして身躰を痩せしむ、最後に彼の恐るべき肺病の萌芽を顯すなり彼の有名なる肝油の精と次亞燐酸の調合物なるスコット乳菓は能く咳嗽及風邪を去り肺臟を強くして活力を與ふること實に驚くべし●◎●此の乳菓の洪大なる滋養分が嬰兒、小兒及虚弱なる母親を益すること實に大にして、其味も至て滋味なれば喜で服用するなり

此の乳菓が精氣を增し滋養分多く最も効驗あるものなるは世界の大醫の擧て證明するところなり

○スコット乳菓の説明書御入用なれば横濱八十九番日本支那貿易商會へ此の雜誌にて御承知の旨御申越あれば無代價にて呈す

左の大取次所の外各藥舗にて賣捌き居れば御購求ありたし

横濱境町	友田嘉兵衛
仝境町	鳥居德兵衛
仝太田町	大川佐兵衛
東京本町四丁目	島田久兵衛
仝室町	資生堂
仝本町三丁目	島田忠兵衛
大阪道修町二丁目	小西儀助
仝道修町二丁目	武田長兵衛
仝道修町三丁目	田邊五兵衛
仝道修町二丁目	田畑利兵衛
仝道修町二丁目	福田清右衛門
仝道修町二丁目	鹽野儀三郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行